実行団体 事後評価報告書	特定非営利活動法人　上田映劇	活動地域	長野県　東信地域

うえだ・こどもシネマクラブ

E-mai　uedaeigeki@gmail.com
URL　http://www.uedaeigeki.com/

資金分配団体名	一般財団法人 中部圏地域創造ファンド	事業の種類	草の根支援事業 2019
資金分配団体事業名	NPO による協働・連携構築事業	実施期間	2020 年 4 月～2023 年 3 月

1 事業概要

社会課題	引きこもりや自殺といった若者が抱える課題の背景には様々な要因が考えられるが、その一つとして家庭や学校以外に居場所の選択肢がなく、幼少期から孤独を抱え続けてしまうことがあげられる。ここ上田地域も不登校者数や青年期の引きこもり問題を多く抱えている為、孤独を生み出さないための居場所としてコミュニティシネマを活用していくことで、学校以外の場に居場所を増やし、オルタナティブな学びの場として子どもたちの可能性と機会を増やしていくことが必要不可欠となる。
事業概要 対象者	不登校、中間教室に通うこどもたち　無業の若者　約 3,000 名 保護者、行政関係者、学校関係者、芸術関係者等　約 30 名
中長期 目標	1、映画館という場を通じて、家にこもりがちな子どもたちやその家族が社会とつながり、孤立しない環境を整えられている。 2、映画という文化芸術が、また映画館という場が、生きづらさを解消するセーフティネットとして機能している。
活動方針	「月 2 回の上映会を開催し、家にこもりがちな子どもたちやその家族の居場所をつくる」 「週の平日に 2 回、映画館を学校に行かない・行けない子どもたちの居場所として開放する」 「うえだ・こどもシネクラブでの映画鑑賞後、主体的な学びの場として（1）「カタリバ」と（2）「放課後映画クラブ」に子どもたちが参加する。」

2022 年 7 月 11 日『距てててて』演劇ワークショップの様子

2022 年 10 月 24 日『ブックラポッタと森の時間』ストップモーションワークショップの様子

3 年 間 の 活 動 の 成 果	
家にこもりがちな子どもの居場所としてコミュニティシネマが評価される	参加者の **8 割**
映画館に来るようになって、不登校児童の引きこもり状態が改善する	参加者の **10 割**
映画館の活動により、他者とコミュニケーションをとることが増える	参加者の **6 割**
コミュニティシネマを通して、新たな学びの機会が生まれる	**12 プログラム**

2 事業計画の記載内容

2 -1 主な活動とアウトプット

※アウトプットの目標達成時期は、断り書きがない限り、2023 年 3 月

活動 1

1.「うえだ・こどもシネクラブ」の発足と、担当者会議の実施（年 12 回）

・上田映劇担当スタッフとアイダオ担当者、侍学園（地域協議会担当者）でまずコアチームを作り、年間計画をたてる。

・協力団体してくれる関係者に呼びかけ、担当者会議を拡大する。

<table>
<tr><td>アウトプット</td><td colspan="3">担当者が「うえだ・こどもシネクラブ」を発足し、担当者会議で計画を立てる。</td></tr>
<tr><td rowspan="3">指標　1</td><td colspan="3">①　開催回数　②出席者・出席団体数　③事業計画数</td></tr>
<tr><td>初期値</td><td>目標値</td><td>実績</td></tr>
<tr><td>②　0 回
②　0 名
③0 回</td><td>①12 回／年
②6 名・6 団体
③　12 回／年</td><td>①　開催回数　9 回
〇担当者会議
日時：2021 年 4 月 22 日(木)12：00 - 13：00
開催方法：Ｚｏｏｍ
参加者：4 名（内訳：アイダオ直井恵、髙橋華恵、侍学園平形有子、上田映劇長岡俊平）
※以下、開催は断り書きがない場合 Zoom
※以下、参加者は 4 名時は、同

〇担当者会議
日時：2021 年 5 月 20 日(木)12：00 - 13：00
参加者：4 名

〇担当者会議
日時：2021 年 6 月 17 日(木)12：00 - 13：00
参加者：3 名（内訳：アイダオ直井恵、侍学園平形有子、上田映劇長岡俊平）
※以下 3 名時は、同

〇担当者会議
日時：2021 年 7 月 15 日(木)12：00 - 13：00
参加者：3 名

〇担当者会議
日時：2021 年 8 月 26 日(木)12：00 - 13：00
参加者：3 名

〇担当者会議＋ケース会議
日時：2022 年 4 月 12 日(火)9:30-10:00
参加者：4 名（内訳：アイダオ直井、侍学園平形、泉、上田映劇長岡俊平）
※以下 4 名時は、同

〇担当者会議＋ケース会議
日時：2022 年 5 月 26 日(木)10:00-11:00
参加者：4 名</td></tr>
</table>

			○担当者会議＋ケース会議 日時：2022 年 7 月 21 日(木)9:30-10:30 参加者：4 名 ○拡大ケース検討会議 日時：2022 年 9 月 27 日(木)13:00-14:30 開催方法：侍学園現地、Ｚｏｏｍ参加 参加者：7 名（内訳：アイダオ直井、侍学園平形、高橋、上田映劇長岡俊平、天野さん、続木さん（ハローアニマル）、臼井さん

活動２

２．不登校のこどもたち、不登校傾向のこどもたちとその保護者を対象にした「上映会」への招待（月２回　１回あたり 1～2 作品上映）

・「うえだ・こどもシネクラブ」の上映会に不登校傾向の子どもたちと保護者、関係者を無料招待する。

・教職員、またスクールソーシャルワーカー、相談員等、担当人材を巻き込みながら、学校関係者の任意グループと連絡調整を行う。

・上映会に参加したこどもたちや保護者に対して、状況に応じて侍学園が行うアフタケアやコミュニティカフェ他、各自に適した場に仲介する。

アウトプット	「うえだ・こどもシネクラブ」の上映会にこどもたちが参加する。		
指標　2	連携協議会を通じて、参加した子どもとその保護者の数		
	初期値	目標値	実績
	0 名	80 名／年	○2020 年度参加者数 子ども 102 名　保護者 48 名 ○2021 年度参加者数 子ども 176 名　保護者 90 名 ○2022 年度（2023 年 2 月時点） 子ども 351 名　保護者 256 名

活動３

３-①「カタリバ」… 上映会で映画を観賞したのち、参加者間でざっくばらんに話をするアフタートーク、ティーチイン企画を行う。他者（参加者同士）とのコミュニケーションを向上させる場として活用する。企画を子どもたちが担って開催する形に発展させる。

３-②「放課後映画クラブ」… 映劇に集う高校生などを中心としたクラブ活動への子どもたちの参画を促す。他者（高校生）と協働でひとつの物事に取り組む体験をする場として活用する。

アウトプット	映画鑑賞後の主体的な学びの場として①「カタリバ」と②「放課後映画クラブ」に子どもたちが参加し、運営体験をつむ。		
指標　3	①-Ａ：参加者数　①-Ｂ：カタリバを子どもたち自身の企画で開催できた数など ②-Ａ：参加者数　②-Ｂ：「放課後映画クラブ」子どもたち自身の企画で開催できた数など		
	初期値	目標値	実績
	①-Ａ：0 名 ①-Ｂ：0 回 ②-Ａ：0 名 ②-Ｂ：0 回	①-Ａ：60 名／年 ①-Ｂ：6 回／年 ②-Ａ：80 名／年 ②　-Ｂ：10 回／年	「放課後映画クラブ」 参加者数：3 名 内容：企画会議 日時：2021 年 6 月 25 日 もともと事業計画の段階では、映画を見たあとに高校生を中心に映画の感想を言い合う場を想定していた

			が、新型コロナウイルス感染症の流行に実施を左右されたため、高校生たち自身で上田映劇の PR を行う広報活動に手法を変更している。 具体的には、上田映劇のチラシを作成し、学校の掲示板に掲示するということ。 2021 年 10 月に第 1 号発行予定。 本来、目指していた形での「カタリバ」「放課後シネマクラブ」は未実施。 現在は、平日のシネマクラブを利用してくれる子どもたちに劇場に設置した「つぶやき NOTE」へ映画の感想や最近あった出来事や関心ごとなどを書いてもらい、意見発信の場を設けている。 「つぶやき NOTE」に書かれていた例 **●映画『二重のまち』を見ました。劇中でも出てきたけれど、「伝えたいこと」をそのまま伝えるってすごく難しいことだし、だけど伝える・話すことは大切だなと思いました。** **・私も思っていることをどんどん伝えていこうと思います。** **●（『かそけきサンカヨウ』という映画を見て）** **・「さんかよう」という花をはじめて知りました** **・つい何回もみたくなる、そんな作品でした。** **・2022 年の抱負** **イタリア語を話せるようになる。（中学生）** **部活に行けるようにする（中学生）など**

活動 4

4．映画による教育的効果について調査を行い、調査結果を発信する。

・専門家に聞き取り調査を行う。

・調査結果を各種媒体（上田映劇のＨＰ、ジャーナル）を活用して発信する。

アウトプット	家にこもりがちな子どもたちの新たな学びの場としてコミュニティシネマの効果を検証し、発信する。		
指標　4	①専門家による聞き取り調査 ②本事業参加者へのアンケート ③発信に関わる指標（発行部数等）		
	初期値	目標値	実績
	①　0 名 ②　0 名 ③　無	①12 名 ②100 名 ③映劇ジャーナル 4000 部"	①8 名 2022 年 2 月 13 日 うえだ子どもシネマクラブシンポジウムにて、うえだ子どもシネマの取り組みについて、各識者に意見を伺う。 諏訪敦彦さん（映画監督）「映画館は一人でいても孤独ではない。シェルターとしての機能はとても重要。地域のコミュニティーや教育の拠点になれる可能性がある」 土肥悦子さん（こども映画教室代表理事）「映画館だけで居場所をつくるのは難しい。シネマクラブが成功例として全国に広がればどれだけいいだろうと思う。」 野村政之さん（信州アーツカウンシルゼネラルコーディネーター）「新型コロナウイルスで人々のつながりが分断された。文化芸術は孤立した人々を結びなおす場になっている」 「人や人が表現したもの、他者とのふれあいが文化芸術の一番の核にあるもの。それはつまり学びのきっかけになる」とし、「映画館は一人で成り立ってない。人とコミュニケーションを取りたくない時があっても、映画を観ることで自分にはないものを吸収す

			ることができる。人と会わなくてもいい場所だけど、隣とか後ろに人がいて同じものを見てる」 臼田瑞希さん（県教委東信教育事務所指導主事）「家と学校以外で、自分の特性や個性を生かせる場所を子どもが見つける機会をつくることが重要。」 伊藤茶色さん（民間文化施設「犀の角」スタッフ）「学校と家庭ではない行き先の選択肢が地域の中にあると知ってもらいたい」 早坂淳さん（長野大学社会福祉学部教授）「映画館の役割は 3 つある。1 つ目は文化芸術だからこその居場所としての意義。2 つ目はわたしたちを縛ってる時間や場所から離脱する有効な手段であること、『今』と『ここ』から抜け出して世界と繋がる事の大事さ。これは映画館だからこそできる。3 つ目は、今とここから抜け出した後、自分に戻った時の話。映画館では同じ作品を違う価値観や観点の人が同時に見ている。共に世界に繋がるというある種の共感性は映画館でなければダメ。同じ空間で見ることの意味がすごくあると感じました」 2022 年 6 月 16 日(木)こども映画教室土肥悦子さん こどもと映画を観る視点 2022 年 6 月 17 日(金)チャイルドフィルム工藤さん子どもにとって良質な映画についてアドバイスを求める 2022 年 6 月 17 日(金)三島由紀子監督　シネマクラブを継続していくための映画界全体でのバックアップ体制について話し合う。映画界だけでなく、地域や学校でつながるコーディネートが必要。 ②「うえだ子どもシネマクラブ」上映後、アンケート調査の実施。 計 12 回。 **●感想の一例** **・子どもたちの笑い声やつっこみがたくさん聞かれる素敵な上映でした。シアターの雰囲気も含めて、心に残る時間でした。（高校生・上田市・シネマクラブ見学）** **・子どもたちもたくさん観に来ていて良かったです。出張シネマクラブがあればいいなぁ・・・（保護者・軽井沢町）** **・おもしろかった。また、夏休みがおわってからも参加したいです（小学生・上田市）** **・親子で楽しみました。絵がきれいでかわいかった。くぅが幸せになってよかった。（小学生・上田市）** **・自由に参加できる雰囲気がとてもいいです（保護者・上田市）** ③映劇ジャーナルを毎月発行。計 3 回。 各 1500 部配布

2-2　3年間のインプット

	計画値		実績値	
資金	事業費　（自己資金含む）		事業費　（自己資金含む）	
	直接事業費	6,439,800 円	直接事業費	4,939,260 円
	管理的経費	0 円	管理的経費	0 円
	コロナ緊急支援	1,366,000 円	コロナ緊急支援	1,366,000 円
	自己資金	1,440,000 円	自己資金	1,440,000 円
	評価関連経費	130,020 円	評価関連経費	0 円
人材	内部：合計 3 人（担当者 2 人、事務局 1 人）		内部：合計 3 人（担当者 2 人、事務局 1 人）	

	外部：合計 20 人（高校生や学校関係者等）	外部：合計 20 人（高校生や学校関係者等）
資機材・その他		コロナ対策換気用エアカーテンと扉の設置

1）資金インプットの特徴、主要な支出項目

うえだこどもシネマクラブで上映する映画上映料や上映後に行うワークショップへの諸謝金が主な事業費。

主要な支出項目

映画上映料、給料手当、修繕費、諸謝金、広告宣伝費、雑費、旅費交通費

2）自己資金の種類、資金調達で工夫した点

主に通常の映画館業務による収益を自己資金に充てている。

またそのほかの資金調達で工夫した点とは別になるが、シネマクラブの活動に賛同いただく方からご寄付いただき、それを自己資金の一部に充てた。

3）人材インプットの役割分担等

○内部担当者

名前	所属	役割
長岡俊平	上田映劇	総務兼事務局
原悟	上田映劇	番組選定
直井恵	アイダオ	活動支援
髙橋華恵	アイダオ	活動支援
泉佳織	アイダオ	活動支援
長岡秀貴	侍学園・アイダオ・上田映劇	活動方針指針決定
平形有子	侍学園	活動支援

○外部担当者

続木奏絵（ハローアニマル・活動への助言）

3 事後評価の方針

3-1 評価の体制

外/内	氏名	所属・役職	評価の分野
内部	長岡俊平	上田映劇・総務	調査内容の整理
内部	直井恵	アイダオ	アンケート調査
内部	平形有子	侍学園スクオーラ今人	調査内容の精査
外部	続木奏絵	ハローアニマル	調査内容の精査

3-2 事後評価のポイント

1	**家にこもりがちな子どもの居場所としてコミュニティシネマが評価されているか**
2	**映画館に来るようになって、不登校児童の引きこもり状態は改善したか**
3	**映画館の活動により、他者とコミュニケーションをとることが増えたか**
4	**コミュニティシネマを通して、新たな学びの機会が生まれたか**

4　事業の主要な成果と、それを実現した要因分析

※アウトカムの目標達成時期は、断り書きがない限り、2023 年 3 月

4-1　家にこもりがちな子どもの居場所としてコミュニティシネマが評価されているか。居場所と感じられるようになったポイントは何か。

成果 1	**上田映劇がシネマに参加した子どもの内の 8 割の間で、気軽に来られる居場所だと実感されるようになった**		
アウトカム指標　1	居場所としてコミュニティシネマを評価する声の割合		
	初期値	目標値	実績
	記録なし	参加した子どものうち 8 割	参加した子どものうち 8 割
評価方法	コミュニティシネマの利用者を対象にアンケート調査を実施。(2022 年 12 月 10 日～2023 年 2 月 2 日) （調査対象：187 人、アンケート回収数 22 人） 上記調査結果を、ケース検討会議にて協議をし、分析した。(2 月 6 日会議実施。SSW、上田映劇長岡、アイダオ直井の 3 名が出席)		

1）活動内容＆活動から生まれた成果

●毎月（2 年目からは月 2 回）開催する映画上映会が、家から出るきっかけに

・子どもたちが興味を持ちうる、自然や生きもの、アニメーションなどを題材とした作品を選定して上映会を行った。

・学校に行けていない、行かない子どもたちが SSW や学校の先生方の紹介により、上映会に参加してくれるようになった。

・3 年間の活動のなかで、参加者層に大きな変化は生まれなかったが（主に小・中学生)、回を重ねるごとに毎回足を運んでくれる子どもたちや親御さんも増えてきた。

・毎回、足を運んでくれる子どもたちや親御さんたちが増えていくことが居場所としての機能を果たしていると考えている。

●映画後のアクティビティの実施と反応

・映画で描かれる題材への理解や興味を深めるため、採掘のワークショップやストップモーションアニメの制作ワークショップを行った。

〇参加者の反応、アンケート等の回答

・化石の発掘が楽しかった（2022 年 1 月 17 日『くじらびと』採掘ワークショップ）

・むしの化石がたくさんでてきた（2022 年 1 月 17 日『くじらびと』採掘ワークショップ）

・人形がうごくのがおもしかった（2022 年 10 月 24 日『眠れない夜の月／プックラポッタと森の時間』ストップモーションアニメワークショップ）

〇アクティビティの効果の振り返りの方法、そうした評価をどう活用・展開したか等。

・アクティビティ実施後、アンケートの回収及び回答率の集計。

・映画だけを鑑賞してもらう回に比べて、アンケートの回収率と回答率が高くなる。

・アンケートをもとに子どもたちや親御さんの興味関心がどこにあるのか分析し、次回以降の映画選定に役立てた。

2023 年 1 月 16 日『RRR』応援上映実施時の写真

2022 年 1 月 17 日『さよならティラノ』採掘ワークショップの様子

2）成果につながった要因は何か。

●他人の存在を感じつつ、個でいられる空間を提供

〇参加者のアンケートの結果

・周りに干渉され過ぎるのは苦手なものの、1 人でいることが好きな訳ではなかったので、程よい距離感で参加させていただける所が合っていたのだと思います。また、ボランティアや皆で何かをする事にやりがいを感じるので、そんな事も体験していかれる所も合っています。（上田市・女性・13 歳～15 歳）

・こんな世界もあるんだなぁと感じた。映画館という発想がすごく素敵です（上田市・女性・50 歳代）

・学校は楽しくないけれど、ここにくると気分転換になる。（上田市・男性・13 歳～15 歳）

●多様な価値観・生き方が肯定される実感

・久しぶりに長女のようちえん時代の親子数名に再会でき、学校に行かない我が子との関わりの変遷について、紆余曲折あったことなど聞くことができ、みんないろいろな生き方で頑張ってるんだな、自分だけじゃないんだな、と温かい気持ちになった。（佐久穂町・女性・40 歳代）

3）気づきと今後に向けて

・子どもが映画とその製作と映画館という新しい世界を知り、興味を持ったことで外出範囲が広がったこと。また、そこで知り合ったお友達を通じ自分を客観視できるようになったことが大きな出来事でした。保護者としては、こどもと二人きりになりがちな時間を有意義に、また映画をみて元気になったり、パワーチャージャの場として活用させていただけたこと。スタッフのみなさんや出会った方とおしゃべりして、すこしでも明るい気持ちを取り戻し家に戻ることかができることが、いつもとてもありがたかったです。

以上のような参加者の声を寄せていただき、映画館が子どもたちの居場所となりうるということを実感することができた。また、映画館に通うことによって、映画を鑑賞する以外に様々な年代の人たちの価値観に触れることによって子どもたちと親御さんにも新たな発見や気づきが生まれるという副次的な効果も見受けられた。

4）成果を表すエピソード・参加者の声・データ等

〇参加者の声

・以前子どもがお世話になった子ども食堂のボランティア元高校生と再会したり、不登校だった時の中間教室の元先生と会ったり、福祉や教育関係の知り合いに会ったり、偶然が多く、行くと誰かしらに会って話も合って長い時間ロビーで輪になっていつも立ち話になり楽しい時間。帰りの車の中で感想を言い合い、話が盛り上がり、親子の話す時間が増えたり、鋭い洞察力や感性に気がつき成長を知った。(軽井沢町・女性・40 歳代)

4-2　映画館に来るようになって引きこもり状態は改善したか。改善につながったポイントは何か。

成果 2	**うえだ子どもシネマクラブに参加した保護者（または子ども）の 10 割が新たなことに関心を持ち始め、気持ちに変化を感じたり、何か始めたりしたことがあると回答した**		
アウトカム指標　2	参加者のうち、ひきこもり状態が改善したと感じている不登校児童の割合、保護者の割合など		
	初期値	目標値	実績
	2-1 子ども　記録なし 2-2 保護者　記録なし	2-1 参加した子どもたちのうち 6 割 2-2 参加した保護者のうち 6 割	2-1 参加した子どもたちのうち 10 割 2-2 参加した保護者のうち 10 割
評価方法	コミュニティシネマの利用者を対象にアンケート調査を実施。(2022 年 12 月 10 日～2023 年 2 月 2 日) （調査対象：187 人、アンケート回収数 22 人） 上記調査結果を、ケース検討会議にて協議をし、分析した。(2 月 6 日会議実施。SSW、上田映劇長岡、アイダオ直井の 3 名が出席)		

1）活動内容＆活動から生まれた成果

・コミュニティシネマの利用者を対象にアンケート調査を実施したところ、引きこもり状態の改善について、以下のような評価を得ることができた。

●毎月（2 年目からは月 2 回）開催する映画上映会が、家から出るきっかけに

○参加者の声

子どもが映画とその製作と映画館という新しい世界を知り、興味を持ったことで外出範囲が広がったこと。また、そこで知り合ったお友達を通じ自分を客観視できるようになったことが大きな出来事でした。(佐久市・女性・7 歳～10 歳)

子どもが映画とその製作と映画館という新しい世界を知り、興味を持ったことで外出範囲が広がったこと。また、そこで知り合ったお友達を通じ自分を客観視できるようになったことが大きな出来事でした。保護者としては、こどもと二人きりになりがちな時間を有意義に、また映画をみて元気になったり、パワーチャージャの場として活用させていただけたこと。スタッフのみなさんや出会った方とおしゃべりして、すこしでも明るい気持ちを取り戻し家に戻ることかができることが、いつもとてもありがたかったです。(佐久市・女性・7 歳～12 歳)

2）成果につながった要因は何か。

月 2 回の上映会の開催と週 2 回の平日利用の場を設けることで、顔なじみにもなり気軽に外に足を運べ

るきっかけになったのではないかと思われる。**（拡大ケース検討会議時の続木奏絵コメント）**

3）気づきと今後に向けて

〇参加者の声

・映画館の仕事に興味が湧いた（東御市・女性・20 歳代）

・自作の動画づくりに熱心に取り組んでいる（上田市・男性・7 歳～10 歳）

子どもたちが映画館に来ることによって、映画で描かれるテーマ以外にも、映画館という仕事への興味や実際に動画を撮影するなど、映画鑑賞の枠を超えたものに子どもたちが興味関心を向けてくれることがわかった。

今後も子どもたちには映画鑑賞をとおして、映画のみならず新たな学びを与えられるようなワークショップやプログラムを組んでいきたい。

4）成果を表すエピソード・参加者の声・データ等

〇アンケートより

・以前子どもがお世話になった子ども食堂のボランティア元高校生と再会したり、不登校だった時の中間教室の元先生と会ったり、福祉や教育関係の知り合いに会ったり、偶然が多く、行くと誰かしらに会って話も合って長い時間ロビーで輪になっていつも立ち話になり楽しい時間。帰りの車の中で感想を言い合い、話が盛り上がり、親子の話す時間が増えたり、鋭い洞察力や感性に気がつき成長を知った。（軽井沢町・女性・40 歳代）

4-3　映画館の活動により、他者とコミュニケーションをとることが増えたか。

成果 3	**うえだ子どもシネマクラブに参加した子どもの 6 割が顔なじみになり、おしゃべりできる人ができたと回答した。**		
アウトカム指標 3	参加者のうち、他者とコミュニケーションをとることができるようになったと答える割合		
	初期値	目標値	実績
	記録なし	参加した子どものうち 8 割	参加した子どものうち 6 割
評価方法	コミュニティシネマの利用者を対象にアンケート調査を実施。（2022 年 12 月 10 日～2023 年 2 月 2 日） （調査対象：187 人、アンケート回収数 22 人） 上記調査結果を、ケース検討会議にて協議をし、分析した。（2 月 6 日会議実施。SSW、上田映劇長岡、アイダオ直井の 3 名が出席）		

1）活動内容＆活動から生まれた成果

月 2 回の上映会の実施し、週 2 回の居場所開放を行った。

定期的に上映会や居場所利用する子どもたちのうちや劇場に立つスタッフと子どもたちの間で、少しずつ関係性が構築された。

例えば、子どもたちの間では今読んでいる本や聴いている音楽など趣味や興味関心の出来事を話してい

る様子が見受けられた。また子どもたちとスタッフの間では身の回りの出来事や学校の進路の相談、心情の変化など悩みごとのような相談をしてくれるようになった。

２）成果につながった要因は何か。

定期的な上映会の開催と、そこにいけば誰かいる（会える）といった安心感が成果につながったのではないかと感じている。

周りに干渉され過ぎるのは苦手なものの、１人でいることが好きな訳ではなかったので、程よい距離感で参加させていただける所が合っていたのだと思います。（参加者の声）

上記の声にもある通り、映画館という個の場所（映画鑑賞時）が確保されている状況がほどよい距離感を生んで、利用者の安心感への理由として裏付けることができる。

以前子どもがお世話になった子ども食堂のボランティア元高校生と再会したり、不登校だった時の中間教室の元先生と会ったり、福祉や教育関係の知り合いに会ったり、偶然が多く、行くと誰かしらに会って話も合って長い時間ロビーで輪になっていつも立ち話になり楽しい時間。帰りの車の中で感想を言い合い、話が盛り上がり、親子の話す時間が増えたり、鋭い洞察力や感性に気がつき成長を知った。（参加者の声）

また、上記の声にあるとおり、映画館という不特定多数の人が常時訪れる場所であることから、偶然の出会いや再会の機会が生まれることも少なくない。こういったことから、映画館という娯楽施設を活用することで思いがけない出会いの機会の創出が成果につながった一因と考えている。

３）気づきと今後に向けて

目標値に達しなかった要因としては、いい意味で映画館が個になれる場所ということに気づいた。

もちろん顔なじみやおしゃべりができることに越したことはないが、能動的にひとりになれる居場所としても機能しているということの反証でもあると思う。

４）成果を表すエピソード・参加者の声・データ等

〇参加者の声

- **久しぶりに長女のようちえん時代の親子数名に再会でき、学校に行かない我が子との関わりの変遷について、紆余曲折あったことなど聞くことができ、みんないろいろな生き方で頑張ってるんだな、自分だけじゃないんだな、と温かい気持ちになった。（佐久穂町・女性・7 歳～12 歳）**
- **以前子どもがお世話になった子ども食堂のボランティア元高校生と再会したり、不登校だった時の中間教室の元先生と会ったり、福祉や教育関係の知り合いに会ったり、偶然が多く、行くと誰かしらに会って話も合って長い時間ロビーで輪になっていつも立ち話になり楽しい時間。帰りの車の中で感想を言い合い、話が盛り上がり、親子の話す時間が増えたり、鋭い洞察力や感性に気がつき成長を知った。（軽井沢町・女性・16 歳～18 歳）**
- **シネマクラブで知り合えた方のお話しを聞いたりして、自分の進路を具体的に考えられる様になった。（上田市・女性・13 歳～15 歳）**

4-4　コミュニティシネマを通して、新たな学びの機会が生まれたか

成果 4	**うえだ子どもシネマクラブを通して、12 のプログラムを実施し、新たな学びの機会が生まれた**		
アウトカム指標　4	コミュニティシネマを通して生まれた新たな学びの場や活動の件数と関わる子どもたちの数		
	初期値	目標値	実績
	記録なし	活動が３つ、係る子どもたちが延べ３０人	活動が 12、係る子どもたちが延べ 130 名
評価方法	シネマクラブで実施したプログラム振り返り、その効果を精査。 上記のプログラムをケース検討会議にて協議をし、分析した。（2 月 6 日会議実施。SSW、上田映劇長岡、アイダオ直井の３名が出席）		

1）活動内容＆活動から生まれた成果

・『ブレッドウィナー』ノラ・トゥーミー監督オンライン舞台挨拶　実施日：2020 年 10 月 26 日
・『劇場版ごん』ストップモーションアニメの人形に触れてみよう　実施日：2020 年 12 月 21 日
・『風の電話』諏訪敦彦監督舞台あいさつ　実施日：2021 年 3 月 15 日
・『ブータン　山の教室』石川直樹さんアフタートーク　実施日：2021 年 5 月 24 日
・『僕の帰る場所』藤元明緒監督舞台あいさつ　実施日：2021 年 6 月 7 日
・『海辺の金魚』小川沙良監督舞台あいさつ　実施日：2021 年 7 月 5 日
・『さよならティラノ』化石採掘ワークショップ　実施日：2022 年 1 月 17 日
・『距てて て』演劇ワークショップ　実施日：2022 年 7 月 11 日
・『掘る女　縄文人の落とし物』黒曜石ワークショップ　実施日：2022 年 10 月 3 日
・『眠れない夜の月／プックラポッタと森の時間』ストップモーションアニメワークショップ　実施日：2022 年 10 月 24 日
・『RRR』応援上映　実施日：2023 年 1 月 16 日
・『さかなのこ』沖田修一監督舞台あいさつ　実施日：2023 年 1 月 23 日

2）成果につながった要因は何か。

国内外の映画監督から貴重な話を聞く機会や映画に関連したワークショップを組むことで、子どもたちの興味関心の多方面に向かせることができた。

例えば、『掘る女』黒曜石ワークショップを行った際に下記のような感想が上がった。

映画は少し難しかったりして寝ちゃう時もあった。ワークショップは上手く出来ない時もあったけど教えてもらったり手伝ってもらってキーホルダー完成してうれしかった。（参加者の声）

上記の感想から映画によっては、内容が難しかったり時間が長かったりして退屈してしまう子どもたちも出てきてしまうが、ワークショップで体や手を動かす作業を行うことで映画で描かれることやテーマに少しでも興味関心を引き付けることができたと考えている。

3）気づきと今後に向けて

監督の舞台挨拶などは子どもによっては退屈で飽きてしまう（劇場をでてしまう）子もいた。逆にワークショップ系の体を動かしたり、見て触れたりするプログラムは集中して取り組む姿が見られた。

今後、同様のワークショップを組むときの参考にしたい。

４）成果を表すエピソード・参加者の声・データ等

〇参加者の声

・若い監督の、プロデューサーさんのお話を昨日おききして、本日、一作目を拝見して、すばらしいな、映画の可能性を感じました。
・ワークショップで芝居の体験をしてみて、緊張したけど面白かった。芝居とかにちょっと興味があったので体験できて良かったです。配役もうまくやってくれてやりやすかったです。
・ワークショップが普段やらない、人前でのお芝居をやって、おもしろいと思った。映画は、構成がおもしろかった。
・ワークショップ「演じる」というのが新鮮で緊張したが、とても刺激を受けた。
・実際にセリフを言って、1番目の発表でテンションあがりまくりで、緊張したけれど、楽しかった。盛り上がったです。
・ワークショップは見てるだけだったけど、みんなすごく上手ですごかった。映画もおもしろかった。
・ワークショップ難しかった。だけど映画の雰囲気が良かった。
・初めて黒曜石の石を見たし、けずる作業の体験をしました。石の表と裏を道具を使ってけずっていくのですが以外と難しくて、見本と同じようには作成できなかったです。
・体験することの少ない黒曜石のワークショップをして、家に飾れるものを作れて良かった。
・映画は少し難しかったりして寝ちゃう時もあった。ワークショップは上手く出来ない時もあったけ　ど教えてもらったり手伝ってもらってキーホルダー完成してうれしかった。
・ワークショップは楽しく作業出来ていたので、子どもも楽しめると思った。

5 特筆すべき成果

～予測していなかった成果、副次的な効果、注目すべきエピソード等～

5-1　つぶやきノートによる効果

平日のシネマクラブを利用してくれる子どもたちに劇場に設置した「つぶやき NOTE」へ映画の感想や最近あった出来事や関心ごとなどを書いてもらい、意見発信の場を設けている。

「つぶやき NOTE」に書かれていた例

- **映画『二重のまち』を見ました。劇中でも出てきたけれど、「伝えたいこと」をそのまま伝えるってすごく難しいことだし、だけど伝える・話すことは大切だなと思いました。**
  私も思っていることをどんどん伝えていこうと思います。
- **(『かそけきサンカヨウ』という映画を見て)「さんかよう」という花をはじめて知りました。つい何回もみたくなる、そんな作品でした。**
- **2022 年の抱負**
  イタリア語を話せるようになる。(中学生)
  部活に行けるようにする（中学生）　など

普段、子どもたちと何気ない日常の会話することはよくあるが文字にするとより個性が見えてくるようになる。映画を見終わった直後の子どもたちに感想を聞いても、うまく言葉にすることができない子どもたちが多いが、いったん自分のなかで整理し書いてみることで、より自分のなかで映画を咀嚼することができて理解を深められるように思う。

5-2　平日の居場所開設までのエピソード

月一回の上映会を行っていくなかで、学校に行けていない・いかない子どもたちの平日の居場所の選択肢が少ないということがわかっていった。なかには中間教室に通っている子もいるが、民間の施設で平日に利用できる施設というのは限られていることが見えてきたため、上映会に参加してくれている子どもたちに平日（水・金）も利用してもらってもいいよと声がけを行ったのがきっかけである。

実際に利用してくれている子どもたちには、映画館で上映されるチラシへのはんこ押しの作業やチラシの仕分け作業、また館内のポスター張り替え作業を行ってもらい、お昼ごはんを一緒に食べたりして過ごしている。

5-3　インタビューから見えた上田方式の特徴

2022 年 6 月 16 日(木)こども映画教室土肥悦子さんへの聞き取り調査を渋谷にて行う。 （聞き取り調査の資料は別添）
こどもと映画を観る視点について伺った。 こども映画教室の特徴としては、様々な場所を使って（例えば映画館や学校）子どもたちに鑑賞ワークショップや映画撮影ワークショップを行うことができる。場所を持たない分、様々な場所に赴き、その土地や人たちにあった柔軟な対応ができる 一方で場所を持たないぶん、**「強度がない」**と土肥さんは仰った。 **「全てが揃っている気がする、上田は。場所と人と金。場所が整い、人が整い、お金が手に入ったらできるかな。」**
結論：土肥さんのお話から見えてきたうえだ子どもシネマクラブの特徴としては、人、場所、お金

がそろっているからこそできた取り組みだということ。

2022 年 6 月 17 日(金)
チャイルドフィルム工藤さん子どもにとって良質な映画鑑賞についてとうえだ子どもシネマクラブについてアドバイスを求める
（聞き取り調査の資料は別添）

以下、インタビューから工藤さんの言葉を引用。
「上田で（外に）出てきて、映画を見てくれるだけでも第一歩だと思うんですけど、感想を話し合ったりするの、ちょっとまだハードルが。そのレベルの人も、話したいって人もいると思うけど、その手前の人もいるのかなって思う」

「メタ化の良いところはね、何が問題なのかわかるとあとは解決するだけなんですよね。それで問題に気づくって外に一回出して、高いところから問題を見るという構造で、こういうものをアニメーションにして、自分もそれを見た時に見える角度がすごい変わるはずなんですよね。」

「このプログラムの最大の特徴っていうのが、中間（聞き取れず）、映画館が自分達で始めたわけでもないし、学校が言い出して映画館を貸してるだけっていう活動でもない。そこがやっぱり強さだなと思ってるの。だから全国でやったほうがいいんだけど、そこの真ん中のコーディネートをする人が非常に重要だと思うんですよね」

「時間はかかりますけど、続けているとやっぱり相談とか、うちもやりたいんだけどみたいなことは出てくるんですよね。だから、ちょっとそういうところと話していく中で、繋がりを作っていくとか、仲間がいるってすごい最高ですよね」

結論：工藤さんのお話を伺って、映画の配給をやられている観点から全国のミニシアターの現状も見えてきた。どこのミニシアターも苦労しているなかで、「うえだ子どもシネマクラブ」の活動は魅力的と言ってもらえる反面、どこの劇場でも「うえだ子どもシネマクラブ」のような活動ができるというわけではないということもわかってきた。
映画館が第三の居場所として機能するためには、場所と地域と人が連携することが必要、逆にいうとそのひとつも欠けていると十全に機能することが難しいといえる。

2022 年 2 月 13 日「うえだ子どもシネマクラブシンポジウム」にて各識者にうえだ子どもシネマクラブの特徴について伺った。

各識者の言葉
諏訪敦彦さん（映画監督）「映画館は一人でいても孤独ではない。シェルターとしての機能はとても重要。地域のコミュニティーや教育の拠点になれる可能性がある」

土肥悦子さん（こども映画教室代表理事）「映画館だけで居場所をつくるのは難しい。シネマクラブが成功例として全国に広がればどれだけいいだろうと思う。」

野村政之さん（信州アーツカウンシルゼネラルコーディネーター）「新型コロナウイルスで人々のつながりが分断された。文化芸術は孤立した人々を結びなおす場になっている」
「人や人が表現したもの、他者とのふれあいが文化芸術の一番の核にあるもの。それはつまり学びのきっかけになる」とし、「映画館は一人で成り立ってない。人とコミュニケーションを取りたくない時があっても、映画を観ることで自分にはないものを吸収することができる。人と会わなくてもいい場所だけど、隣とか後ろに人がいて同じものを見てる」

臼田瑞希さん（県教委東信教育事務所指導主事）「家と学校以外で、自分の特性や個性を生かせる場所

を子どもが見つける機会をつくることが重要。」 伊藤茶色さん（民間文化施設「犀の角」スタッフ）「学校と家庭ではない行き先の選択肢が地域の中にあると知ってもらいたい」 早坂淳さん（長野大学社会福祉学部教授）「映画館の役割は 3 つある。1 つ目は文化芸術だからこその居場所としての意義。2 つ目はわたしたちを縛ってる時間や場所から離脱する有効な手段であること、『今』と『ここ』から抜け出して世界と繋がる事の大事さ。これは映画館だからこそできる。3 つ目は、今とここから抜け出した後、自分に戻った時の話。映画館では同じ作品を違う価値観や観点の人が同時に見ている。共に世界に繋がるというある種の共感性は映画館でなければダメ。同じ空間で見ることの意味がすごくあると感じました」
結論：様々な立場の方から映画館の重要性が語っていただいた。なかでも皆さんに仰っていただいたのが、映画館は一人の空間を保ちながら孤独な場所ではないということである。実際にコミュニケーションを取ることはなくても、同じ空間で同じ映画を共有することが人々にとって社会のなかで孤立していないと感じられるコミュニケーションの新たな形ではないかと再確認した。

6．協働・連携による課題解決の体制の充実

6-1　チーム内の協働・連携

1）チーム内で協力した内容　　A0：アイダオ、A1 侍学園

上映会事業			
協力活動の項目	A0	A1	協力した内容
広報	○		チラシの制作および教育関係者への周知
内容的な連携	○		上映する映画作品選定の助言
作業面の手伝い	○	○	上映会当日の来場者の案内、上映会後の会場片付けの手伝い
その他			

協力による効果

アイダオの協力によって、東信教育事務所や教育委員会など、教育支援者への事業の周知がより広まった。ターゲットとなる子どもたちのニーズに合わせた、作品選定をすることができた。

人手不足によって、上映会の周知や来場者の対応など、1 団体のみでは対応しきれない部分をアイダオ及び侍学園の協力によって、滞りなく実行することができた。

平日の居場所づくり			
協力活動の項目	A0	A1	協力した内容
広報	○		教育関係者や保護者への呼びかけ
内容的な連携	○	○	平日の居場所での子どもたちへの対応のお手伝い
作業面の手伝い	○	○	居場所における活動での子どもたちへの仕事の作業の振り分け
その他			

協力による効果

アイダオの協力によって、日常業務によって手が回らなかった劇場を居場所として開放する活動を行うことができた。また、子どもたちへの対応においては、侍学園の生徒たちも居場所づくりに参加し、子どもたちと一緒に話をしたり、劇場業務の手伝いを行ってくれたりした。

2）自団体の貢献と体制整備

（1）チームに対して行った協力内容、その効果

映画館を居場所として活用、そして上映を続けていくことで、各々の活動では見えてこなかったケースの被支援対象者が見えてきた。

映画館という一般的には娯楽施設という意味合いが強い場所を活用することで、自立支援施設や中間教室とは違った足の運びやすさが功を奏し、侍学園などでの直接的な支援を求める若者の紹介へとつながった。

（2）自団体の体制整備、知見やノウハウの蓄積についての変化・成果と評価

今回、チームを共同して事業を行うことで横のつながりができたことにより、劇場運営での課題や困りごとの相談など緊密に連携を取ることができるようになった。

6-2　支援対象者・参加者の参加促進、関係形成

1）支援対象者・参加者の増加・広がりの実績、成果につながった工夫・協力等

スクールソーシャルワーカーを通じて、新規の小中学生が微増。
子どもを連れてくるのはまだ難しい下見を兼ねた保護者の参加が増えた。（2021 年まで）
事業 3 年目になり、様々なメディアに取り上げていただくことによって、世間的な認知も広がりつつある。新規で利用してくれる親御さんも増えてきて、月 2 回の上映会には必ず来てくれる親御さんも増えてきた。

スクールソーシャルワーカーや教育事務所を通じて、本事業の取り組みは少しずつ広まってきたと感じている。

2）支援対象者・参加者の変化、変化が生まれた要因・工夫

上田市内の大学生が活動に協力してくれている。
内容は、平日の子ども受け入れの対応や「うえだ子どもシネマクラブ」上映会当日のアシスタントなど。
「うえだ子どもシネマクラブ」の活動に興味を持ってくださった全国のミニシアターを応援する活動「ミニシアタークラブ」が本活動をインターネット動画サイトにて活動を紹介。
大学生や高校生の関わりにより、小中学生の子どもたちには年の離れた年代との交流が生まれ、大学生たちには自らの研究テーマの深堀に繋がっていると感じている。
「ミニシアタークラブ」の協力により、映画館の SNS を通じて、本事業の全国的な周知につながった。

6-3　課題解決に取り組む協力関係の変化

1）本事業実施前／実施後の変化

本事業実施前の関係	
上田映劇の上映活動には、主に、来場者、賛助会員（運営を支援する）、ミニシアタークラブ（映画を届ける側と観客の相互コミュニケーション）といった映画関係者がステークホルダーとなっていた。	上田映劇 来場者 賛助会員 ミニシアタークラブ

事業を通してできた関係			
チームで取り組んだことで、これまでゆるくつながっていた横の関係がより確かなものになった。実際に事業を連携して行ったりシンポジウムへの登壇していただいたりするなど、直接的に連携できたことがこの 3 年間のなかでも大きな成果のひとつだと考えている。 また、連携してできたことで引きこもりや不登校児童の特性などから、それぞれの事業ごとにステップを踏んで紹介しあ	1	アイダオ	役割： 新聞、TV 等による紹介 東信教育事務所、教育委員会を通した呼びかけ 企画運営のお手伝い
	2	侍学園	役割： 侍学園によるカフェ ワークショップの講師
	3	犀の角	役割： うえだイロイロ倶楽部との連携 ワークショップの場所として利用
	4	リベルテ	役割： リベルテ利用者の上映会への参加

えることがわかった。 うえだシネマクラブ（第 1 ステップ） ↓ うえだイロイロ倶楽部（第 2 ステップ） ↓ 侍学園（第 3 ステップ）			事業への助言
	5	ハローアニマル	役割： ハローアニマル利用者のシネマクラブへの誘導、またシネマクラブからハローアニマルへの誘導
	6	信州アーツカウンシル	役割： 事業への助言
	7	こども映画教室	役割： 映画教室のワークショップ講師
	8	のきした	役割： のきした利用者のシネマクラブへの誘導

２）協力関係を構築する上での工夫

主に上田市内・もしくは近隣にある事業所との連携になるが、それぞれの事業の強みを生かして、ケースバイケースの子どもたちや若者たちをそれぞれの団体に紹介することを行ってきた。
様々な課題を抱えた子ども・若者たちがいるなかで、互いに連携しあうことでより適切な課題解決へと進めることができたと考えている。

7．結論、今後の展望、教訓

7-1　結論：中長期アウトカムに対する本事業の妥当性

1、映画館という場を通じて、家にこもりがちな子どもたちやその家族が社会とつながり、孤立しない環境を整えられている。 **2、映画という文化芸術が、また映画館という場が、生きづらさを解消するセーフティネットとして機能している。**			
事業実施プロセス	**★★★★**	**事業成果の達成度**	**★★★★★**

★★★★★　想定した水準以上にある　　★★★★　想定した水準にある　★★★　想定した水準にあるが、一部改善点が必要
★★　想定した水準に達するのに改善が必要　　★多くの改善の余地がある

●上記のように結論を出した理由（結論の根拠を書くこと）

まず「**映画館という場を通じて、家にこもりがちな子どもたちやその家族が社会とつながり、孤立しない環境を整えられている。**」という点において、映画館という場所が子どもたちにとって孤立しない社会の居場所に十二分になりえると考えている。先に記したアンケート結果のとおり、シネマクラブ（映画館）を利用した子どもたちと親御さんの８割がシネマクラブは気軽に来られる場所と回答いただけたことが根拠である。また、事業を通して関係を構築することができた様々な団体と連携することによって、ケースバイケースの子どもたち・若者たちを街ひいては地域において孤立しない環境整備が整いつつあると考えている。

例えば、子どもたちの特性や個性に合わせて、段階的なプログラムを紹介できるということに強みを感じている。

第１ステップ	第２ステップ	第３ステップ
うえだ子どもシネマクラブ ⇨	うえだイロイロ倶楽部 ⇨	侍学園
【子どもたちの特性】 家から出ることが難しい・ 他人と接するのが難しい	【子どもたちの特性】 学校以外での活動場所を探している	【子どもたちの特性】 自立支援など直接的な支援を欲している

また、**映画という文化芸術が、また映画館という場が、生きづらさを解消するセーフティネットとして機能している。**という点においては、うえだ子どもシネマクラブに参加した保護者（または子ども）の 10 割が新たなことに関心を持ち始め、気持ちに変化を感じたり、何か始めたりしたことがあると回答したことを踏まえるとセーフティネットとしての役割を十分に発揮していると考えている。

映画館に来ることで昔の顔なじみにあったり、同じ年代の子どもたちを出会ったりすることによって、様々な考え方や似た悩みを共有するという場面も少なくない。また実際に映画鑑賞をすることによって、映画から受け取る様々な価値観や生き方は、生きづらさを抱える子どもたちにとってもそれを解消するまではいかずとも和らいでくれるようになると感じている。

また映画監督や芸術分野や教育分野において活躍する専門家や識者の方たちの言葉をとっても、映画館が地域に選択肢として存在する重要性を改めて再確認した。

7-2　今後の取り組み

今後の取り組みとしては、引き続きアイダオ、侍学園など他団体と連携を図り、事業を継続していきたいと考えている。また、本事業を持続可能なものにしていくためにこれまでできていなかった自治会などの地域との連携も図っていきたい。そのためには、本事業の概要をよりよく伝える方法などを模索していく必要があり、より事業に関わりやすくするためのスキームの構築が必要であると考えている。

7-3　事業から得た知見、類似する課題に取り組む団体等に役立つ教訓

今回3団体で取り組んだ事業での経験から得た知見としては、街のいかなる場所でもそこに人が集まることができれば「学びの場」となりえるということです。もちろん地域によっては、場所やものなど限りや限界があるとも思います。現に映画館という場所は、日本全国すべての市町村にあるわけでもなく、都市や地方に限らず、少しずつその数は減っていっています。しかし、映画館という場所にこだわるのではなく、地域のいたるところに人が集まれる場所というのは存在するかと思います。公民館や放課後の学校など、官民一体となれば学びの場をいかなる場所にも創出することができるのではないかと思います。重要なのはそこに関わる大人たちであって、社会と子どもたちをなんとかつなぎとめようと根気強く、なにより真摯に課題に向き合うことが大切だと感じています。
まだまだ私たちが取り組んで事業も乗り越えるべき障壁が山積みですが、ひとつひとつの団体が手を取り合って協力しあれば、少しずつ課題も解決していくと信じています。

8．資料等

資料1【レポート】うえだ子どもシネマクラブ（2_13）
資料2　うえだ子どもシネマクラブ動員数
資料3【アンケート回答】うえだこどもシネマクラブ＆SAMUcafe アンケート
資料4　SNS の反響まとめ
資料5【文字起こし】こども映画教室土肥さんインタビュー
資料6【文字起こし】チャイルド・フィルム工藤さんインタビュー

レポート：うえだ子どもシネマクラブ

「学校に行きづらい日は映画館へ」
2022年2月13日、うえだ子どもシネマクラブは初めてのシンポジウムを開催いたしました。「映画館は未来をつくる学びの場の場」と題し、シネマクラブに来ている子どもたち、映画関係者、有識者の皆さまにご登壇いただき、さまざまな角度からお話ししていただきました。本レポートでは、シンポジウムでの様子をご紹介いたします。

うえだ子どもシネマクラブとは、
2020年8月からはじまったうえだ子どもシネマクラブ。当初は月に1度上映会を行っていましたが、徐々にその回数を増やし、現在（2022年3月時点）では月2回、午前と午後の2回上映を行っています。「映画を通じて、多様な世界に出会って欲しい」という思いを持って作品を剪定し、現在までに51作品を上映してきました。また平日の居場所としても週2回、子どもたちの受け入れを行なっています。

第一部「私がここにいる理由」
第一部ではシネマクラブに参加しているあおばさん、けいじさん、みおさんたち3名が登壇。まずシネマクラブに参加したきっかけについてお聞きしました。シネマクラブではスクールソーシャルワーカーや中間支援教室を通して、活動に関するお知らせを行なっています。登壇した3名のうち2名はスクールソーシャルワーカーに勧められたことをきっかけに参加。もう1名は運営を行なっている直井に直接コンタクトを取ったことがきっかけでシネマクラブと繋がりました。

シネマクラブでの過ごし方について聞いてみると、上田映劇で上映する映画のチラシに日付スタンプを押したり、ポスターを張り替えるなど劇場のお手伝いを行なっていること、3人にはそれぞれ得意な作業があることを教えてくれました。また最近では上田映劇の特別会員で、大学で教鞭を取られている方から英語を教わっているそうです。

印象に残っている映画の話について、あおばさんは「わたしにも年の離れた弟がいるので、そこが重なった」と今泉力哉監督の『かそけきサンカヨウ』を挙げました。石川梵監督の『くじらびと』が印象に残ったというけいじさんは「鯨をとる瞬間、ああいうふうに命が繋がっているんだと感動した」と言葉では表しづらいと言いながらも話をしてくれました。また池田暁監督の『きまじめ楽隊のぼんやり戦争』を挙げたみおさんは「なんで戦争してるのか、みんなわからないけど、川向こうが恐ろしいから戦っている。何も考えなくても生活できるけど『なんでだろう』って疑問に思うことが今までなくて、（この映画を通して）そういうのが大事なんだと思いました」と話していました。

最後にシネマクラブの印象について尋ねると、「学校より居心地が良くて作業にも集中できる。話す相手もいるので、感謝してもしきれない場所だと思います」とけいじさん。あおばさんは「（シネマクラブに）来てる人たちは、学校とかに理由があって行けてない人たちだから相談しやすい。引きこもってしまうより来た方がいい」と話していました。みおさんは「以前、けいじさんが『ここに来て、安心できるなぁ』と話していて、それに自分も共感しました。学校や家庭にはずっと付き合っていく、そして一言で関係が変わってしまうプレッシャーがあります。でもここは、ほどよい距離感でいろんな話ができて楽しいです」とそれ想いを共有してくれました。

第二部「私と映画の物語」
第二部では、上田映劇理事で映画監督の鶴岡慧子監督（『まく子』）や、以前シネマクラブにご参加いただいた諏訪敦彦監督（『風の電話』）からそれぞれビデオメッセージをいただきました。また

三島有紀子監督（『しあわせのパン』）にはオンラインでご登壇いただき、さまざまなお話をお伺いしました。

まず鶴岡監督からは「知らない人の間でひとりになって、暗闇の中で自分と映画だけで対峙して過ごせる。そこでは何かを取り繕ったりせず、素直な状態になれる。そこが映画館に行くのが好きな理由」と映画館で映画を見ることについてや「誰かの人生の幅を広げられるような作品を作れたらと思っています」など作り手としての想いもお話いただきました。

諏訪監督からは、広島のサロンシネマで鑑賞した『ナッシュビル』（ロバート・アルトマン・1975年）についてや、まるで『ニュー・シネマ・パラダイス』（ジュゼッペ・トルナトーレ・1989年）のような映写技師の方との交流についてお話いただきました。最後に「うえだ子どもシネマクラブの活動はすごく大事だなと思っています。学校に行けなくても映画を見においでよと、行ける場所があり、そこに誰かがいる。ひとりになれるけど孤独ではない。またぜひお伺いしたいです」と応援メッセージもいただきました。

オンラインでご登壇いただいた三島監督には「子どもの頃、映画館が居場所で、毎日ランドセルを背負って通っていました」と映画館との関わりについてお話いただき、また「ハッピーエンドやわかりやすい結末が人を楽にするとは限らない。生きづらさを感じてる人たちに見てもらえるような映画を作っている」と映画作りへの想いもお聞きしました。最後に「もしつらいことやもやもやすることがあったら、現実逃避としてどこかに出かけましょう。その中の選択肢の一つとして映画館があるなら良いと思います」というメッセージもいただきました。

第三部：「新しい学びの場としての映画館の可能性」
第三部では教育と芸術についてそれぞれの有識者を交えたフリーディスカッションを行いました。アイダオ、上田映劇、侍学園の3つの団体の理事長である長岡秀貴が進行役を努め、長野県文化振興コーディネーターの野村政之さん、長野大学社会福祉学部教授の早坂淳さんにそれぞれのフィールドから見た「うえだ子どもシネマクラブ」についてお話いただきました。

学校でなければ人は育たないのか
まず長岡から「学校でなければ人は育たないのか」という問いが提示されました。野村さんは「文化芸術は学校に合わせるのではなく、隣にあるという距離感で、子どもたちが文化芸術そのものに触れる機会として提供することが必要」と指摘。多様性という言葉が一般的になりつつある現状について「線引きした座標では測り得ない人間のポテンシャルを、社会の中で実現していかなければいけないという認識をみんなが持ち始めた。今の時代では障害があると言われてきたかもしれない人たちが芸術表現を高め、素晴らしい作品を作ってきたことを多くの人が知っている。多様性を受け止めるためにも教育だけでなく文化芸術の持つ幅も必要」とお話いただきました。また「世の中から貼り付けられ、期待される役割とは、別の形で着直すという場がとても大事」とし、学校だけでは社会関係をトライアンドエラーする場が少ないことについても指摘しました。

早坂さんは「（第一部の）3人に感謝したい。彼らはここが教室になるか、その可能性を見せてくれました」と第一部に登壇した3人の話からシネマクラブが教室になっていると指摘。そして日本と海外の学校教育の違いについてもご紹介いただきました。日本の学校教育は世界的に見ても子どもたちが学校で過ごす時間が圧倒的に長いのに対し、州によって異なりますがドイツの多くの学校は午前中のみ、午後の時間は靴職人の工房やサッカークラブなど子どもたちが好きな場所で過ごすそうです。またドイツの場合、経済的に裕福など家庭の事情によって機会が変わってしまうが、日本ではどの家に生まれても教育機会は公教育が保障してくれる仕組みになっているというお話もお聞きしました。その上で早坂さんは「ドイツの子たちは実に多様に自らの手で自分の

人生を幼い頃から掴みに行っている。これはこれからの時代を生きていく上で、子どもに身につけさせたい能力の筆頭に上げたいなと思っています」と締めました。

映画館の役割について
「映画館の役割について」という問いに対して、野村さんは「人や人が表現したもの、他者とのふれあいが文化芸術の一番の核にあるもの。それはつまり学びのきっかけになる」とし、「映画館は一人で成り立ってない。人とコミュニケーションを取りたくない時があっても、映画を観ることで自分にはないものを吸収することができる。人と会わなくてもいい場所だけど、隣とか後ろに人がいて同じものを見てる」と個人個人に寄っている現状だからこそ、映画館を活用してほしいとおっしゃっていました。

早坂さんは「映画館の役割は3つある。1つ目は文化芸術だからこその居場所としての意義。2つ目はわたしたちを縛ってる時間や場所から離脱する有効な手段であること、『今』と『ここ』から抜け出して世界と繋がる事の大事さ。これは映画館だからこそできる。3つ目は、今とここから抜け出した後、自分に戻った時の話。映画館では同じ作品を違う価値観や観点の人が同時に見ている。共に世界に繋がるというある種の共感性は映画館でなければダメ。同じ空間で見ることの意味がすごくあると感じました」とお話いただきました。

最後に長岡は「大人が責任を持ってこういう場所を作って行かなければと思いました。この地域なら幸せになれる、あるいは生きやすいというのを映劇を中心に作っていけたらと考えています。子どもたちに早く社会に出なさいと言うのではなく、どうやって子どもたちを社会に近づけていくか。その仕組みづくりを行なっていきます」とし、締めの言葉としました。

参加者の声
最後にご参加いただいた皆様の声を少しご紹介いたします。
「うえだ子どもシネマクラブの居心地のよさが垣間見えた気がします」
「『家と学校が全て』という子どもたちが、映画館で『今、ここ』から抜け出して世界と仲間とつながりながら、自分のものさしを持って幸せに生きていける、そんなすてきな未来が見えた気がしました」
「子どもたちがそれぞれが自分の言葉で話していて、どんな思いでシネマクラブの活動に参加しているのかが伝わってきました。安心できる場を作っていただいていて、本当にありがたいことだなと思いました」
など多くの声をアンケートを通していただきました。

おわりに
第一部ではシネマクラブに参加している3名の子ども・若者たち、第二部では三島有紀子監督、諏訪敦彦監督、鶴岡慧子監督など名だたる映画監督たち、第三部では野村政之さん、早坂淳さんという実に多くの方にご登壇いただき、さまざまな角度から「うえだ子どもシネマクラブ」についてお話いただきました。特に早坂さんの「ここは教室になっている」という言葉に励まされ、今後も子どもたちの居場所の一つになれるよう努めていきたいと思いました。またうえだ子どもシネマクラブでは、引き続き、映画館と学びの場、子どもたちの居場所ということについての議論を地域だけでなく全国でも深めていきたいです。

今回はうえだ子どもシネマクラブ初めてのシンポジウムゆえに、不慣れで至らない点もありました。特に配信でご参加いただいた皆様にはご不便をおかけしたかと思います。今後の課題とし、来年度のシンポジウムに向けて改善していきますので、引き続きよろしくお願いいたします。

2020年度

日付	8月24日	9月24日	10月26日	11月26日	12月21日	1月18日	2月22日	3月15日	合計
作品名	この世界の片隅に	はちどり	ブレッドウィナー	ニュー・シネマ・パラダイス	劇場版ごん	8２年生まれ、キム・ジヨン 家なき子　希望の歌声	アイヌモシリ	風の電話	
内訳　子ども	3	24	10	10	15	10	15	15	**102**
保護者	3	2	4	9	5	7	9	9	**48**
教育支援関係者	6	4	10	6	3	2	10	1	**42**
待学園生徒	0	20	16	20	10	12	10	20	**108**
待学園スタッフ	0	4	5	6	4	3	0	5	**27**
そのほか	0	0	3	2	0	1	1	1	**8**
参加者　合計	**12**	**54**	**48**	**53**	**37**	**35**	**45**	**51**	**335**

2021年度

	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21		22		23		24		25	26	27		28		29		30		
日付	4月12日	4月26日	5月10日	5月24日	6月7日	6月21日	7月5日	7月26日	8月2日	8月9日	8月30日	10月25日	10月25日	11月8日	11月8日	11月22日	11月22日	12月6日	12月6日	12月20日	12月20日	1月17日	1月24日	2月7日	2月7日	2月21日	2月21日	3月7日	3月7日	3月14日	3月14日	合計
作品名	時をかける少女 海辺の映画館	夏時間 息子のまなざし	わたしたち	ブータン　山の教室	僕の帰る場所	小さな恋のメロディ 約束の宇宙	海辺の金魚	時をかける少女 （2002） 旅立つ息子へ	いとみち 藍に響け	デジモンアドベンチャー サマーウォーズ	アニメーションの神様、その美しき世界Vol.2&3	ウルフウォーカー	かそけきサンカヨウ	浜の朝日と嘘つきどもと	台風クラブ	くじらびと	Shari	ロング・ウェイ・ノース	カラミティ	オンネリとアンネリのふゆ	グレタ ひとりぼっちの挑戦	さよならティラノ	ノーマン・ザ・スノーマン	くまのアーネストおじさんとセレスティーヌ	スウィートシング	シチリアを拠点としたクマ王国の物語	トムボーイ	リトル・ガール	ちえりとチェリー	彼らが本気で編むときは、	パーフェクト・ノーマル・ファミリー	
内訳　子ども	12	2	5	9	5	18	11	15	8	5	6	8	7	6	1	1	0	5	5	5	3	6	10	11	1	3	2	3	1	1	1	**176**
保護者	2	2	5	12	2	9	7	10	4	1	3	2	4	3	0	1	0	4	3	0	3	0	6	4	0	0	0	0	1	1	1	**90**
教育支援関係者	1	5	5	15	3	8	5	11	3	0	2	1	2	3	2	4	2	1	2	3	0	11	1	2	3	3	2	4	0	1	1	**106**
待学園生徒	0	2	13	1	17	10	10	3	15	3	1	13	1	1	1	11	0	7	0	0	2	6	2	1	1	0	0	0	3	7	2	**133**
待学園スタッフ	0	0	0	2	6	6	3	5	2	2	1	2	1	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	**32**
そのほか	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0	0	2	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	**11**
参加者　合計	**15**	**11**	**28**	**42**	**33**	**51**	**36**	**44**	**32**	**11**	**15**	**27**	**15**	**13**	**4**	**17**	**2**	**21**	**12**	**9**	**8**	**23**	**19**	**18**	**5**	**6**	**4**	**7**	**5**	**10**	**5**	**548**

2022年度

	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45						
日付	4月11日	4月25日	5月9日	5月23日	6月6日	6月20日	7月11日	7月19日	8月8日	8月22日	9月5日	9月12日	10月3日	10月24日	11月21日	12月5日	12月19日	1月16日	1月23日	2月6日	合計
作品名	GUNDA ロスバンド	世界でいちばんのイチゴミルク シングストリート	夢見る小学校 ガガーリン	ハイジ スザンヌ、16歳	ちむぐりさ パイナップルツアーズ	絵を描く子どもたち 若おかみは小学生 梅切らぬバカ	距ててて	ミューン 破戒	ざんねんないきもの事典 河童のクゥ	ゆめパのじかん マイスモールランド タレンタイム	こちらあみ子 バッフィン・ロック 母へ捧げる僕たちのアリア	メタモルフォーゼの縁側 CODAあいのうた アンネ・フランクと旅する日記	掘る女	スーパー30 ブックラポッタと森の時間 ／眠れない夜の月	映画大好きポンポさん わたしは、ダニエル・ブレイク	キートンの探偵学入門 ユーリィノルシュテインカモンカモン	サンタクロースになった少年 川っぺりムコリッタ	バディントン RRR	バディントン2 さかなのこ	日本列島生きもの超伝説 そばかす	
内訳　子ども	8	11	10	6	3	21	8	9	46	18	28	22	12	22	17	41	18	17	34	23	**374**
保護者	5	8	16	7	1	12	14	10	23	22	21	16	9	13	5	21	18	18	17	16	**272**
教育支援関係者	3	5	4	2	14	8	0	5	4	17	5	8	4	4	5	6	2	4	8	2	**110**
待学園生徒	2	0	8	5	10	9	14	4	1	4	2	8	10	3	0	2	6	1	9	0	**98**
待学園スタッフ	2	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	**4**
そのほか	3	0	3	0	0	2	2	4	0	0	2	6	0	2	2	0	0	1	0	3	**30**
参加者　合計	**23**	**24**	**41**	**20**	**28**	**54**	**38**	**32**	**74**	**61**	**58**	**60**	**35**	**44**	**29**	**70**	**44**	**41**	**68**	**44**	**888**

参加者数	2020年度	2021年度	2022年度	合計
子ども	102	176	374	**652**
保護者	48	90	272	**410**
教育支援関係者	42	106	110	**258**
待学園生徒	108	133	98	**339**
待学園スタッフ	27	32	4	**63**
そのほか	8	11	30	**49**
合計	**335**	**548**	**888**	**1771**

タイムスタンプ	①年齢を教えてください。	②性別を教えてください。	③お住いの地域を教えて	④これまで利用くらい、上林	⑤上林会で気に入っているものはありますか。	⑥シネマクラブをきっかけに、自分（または	⑦シネマクラブで観なじみに	⑧ ⑥と⑦の質問に関して、	⑨平日シネマクラブ（水・金	⑩の質問で「ある」とお	⑪ここからはサムカフェにつ	⑫サムカフェで気に入って	⑬サムカフェをきっかけに、	⑭サムカフェで、何かを一緒	⑮ ⑭と⑮の質問に関して、	⑯シネマクラブやサムカフ	⑰その他、ご意見・ご要望等ありましたら、ご記入ください。
2022/12/27 17:41:27	40代	女	上田市内	4回以上	周りを気にしなくてもよい	ある	いる	ない		4回以上	楽しい	ある	いる	観ようができた	増えた	博物館や城	コミュニティスクエア
2023/01/10 11:09:19	7～12歳	女	佐久穂町	2.3回	気軽に来やすい	なんとなくあるような気がする	いる	久しぶりに長女のようなえんない							変わらない		時待はよきいつも提供してくだけ。感謝しかありません。
2023/01/10 11:11:26	21～25歳	女	東御市	1回	気軽に来やすい	なんとなくあるような気がする	いる	映画館の仕事に興味が湧	ある	東御市さいさぼから紹介を受けて					変わらない	シネマクラブのようなおしゃべりが出来たり交流が出来たりだらっと	気軽ななく話しかけてくれる水金 平日中に何ってお手伝いさせてもらいに行きたいと思っています！ 予定が思いたら行かせてもらいますね！！
2023/01/10 11:20:57	13～15歳	女	上田市内	4回以上	気分転換になる	ある	いる	ない		4回以上	おしゃべりができる	ある	いる		変わらない	ダンス カフェ などなど	上田市中間教室 イロハ交通事務ばてらかさ 小学高学年・中学生以上は映画は恋愛過敏ななどとの 映画は面白かったし、別でも良いのでサムカフェの拡大営業。 まったりした場所、話を聞いてもらえるのんびりは出来る場所。
2023/01/10 12:34:12	7～12歳	男	上田市内	2.3回	知らない世界に出会える	なんとなくあるような気がする	いない	ない		1回	面白い時間が過ごせそう	ない	いる	初めての時は緊張してはい	変わらない	ボンプができる場所、人、仲間	アニマルサポート あかりが欲しかった。 母:勉強をそっと教えてもら あさりと聞かれたらいつもなので、その映画を観れて嬉しいようです。 映画を観てる時間や見たことない映画に出会えることが楽しみで回数から自主的にいきました。 こちらがっと思ってくれる場所があるのがありがたいです。
2023/01/10 12:36:26																	
2023/01/10 12:55:44	16～18歳	男	上田市内	4回以上	知らない世界に出会える	なんとなくあるような気がする	いる	ない							増えた		
2023/01/10 16:05:13	13～15歳	男	青木村	4回以上	気分転換になる	ある	いる	ある							増えた		
2023/01/10 17:00:47	16～18歳	女	軽井沢町	4回以上	スタッフ皆さんが温かく迎えて話しかけて下さりきんな方々とさ	ある	いる	以前子どもが幼稚園になっ		2.3回	サムカフェの生徒さんが一	ある	いる	嫌がサムガラのお姉さ	増えた		嬉は、4年本不良状況ったので家族料金やってのくて、有り 百料理とか体験教室などあれば一人暮らしで困ったっと思 また、地域の中 認知で楽しく暮らしていたら、子どもが、こんな場所で過ごすたち幸せだったりろりと感じました。いろるとの入に知ってもらい関係なん人に来て欲しい場所です。
2023/01/10 17:33:10	30代	男	東御市	1回	自分の興味・関心に合っている	ある	いない	ない							変わらない		
2023/01/10 18:40:20	13～15歳	女	東御市	4回以上	知らない世界に出会える	なんとなくあるような気がする	いる	ある		出来たことになるから。					変わらない	料理 お菓子作り ペット動物 キャンプ	勉強を教えてください いつもありがとうございます。 書かなければおおもとでなくて、ダメ出ししましたが、場合に非常が行楽して楽なたんないで、思いものです。子どもを観察の世界に出会わせるきっかけになりました。
2023/01/10 19:12:08	7～12歳	男	上田市内	2.3回	気分転換になる	なんとなくあるような気がする	いない	自作の動画づくりに熱心にこ	いない						増えた	フリーマーケットや高度盛さん、演劇、音楽会、どろんこ遊び興味があっても、なかなかと	子どものみてみて、聞いて良の良い場面はがりで、またけきたくと思っています。色々機能すてけれないことがるいのですが、まつ進来、楽しい思い出します。
2023/01/10 20:51:21	13～15歳	男	上田市内	4回以上	気分転換になる	ある	いる	学校は楽しくないけれど、こい		4回以上	気軽に来やすい	ある	いる	飲み物があると変われたの	増えた	図書館や書店公園	
2023/01/10 21:57:39	7～12歳	女	長野市	4回以上	知らない世界に出会える	なんとなくあるような気がする	いる	ない							変わらない		
2023/01/10 23:11:39	0～6歳	男	上田市内	2.3回	周りを気にしなくてもよい	ある	いない	ない		2.3回	気軽に来やすい	ある	いない		変わらない	語学	和太鼓 こんな素晴らしい全国を続けていってもらえて本当に感謝しています。 大変なことも多々あるかと思いますが、上田にはこんな素晴らし場所があるんだよと自慢できる場所であり続けて行って欲しいです。
2023/01/11 22:54:35	7～12歳	女	佐久市	4回以上	周りを気にしなくてもよい	ある	いる	子どもが映画とその世代は また、そこで知り合った友 保護者としては、こどもと一 になりがちな時間を有意義に スタッフのみなさんや仲間と	ない	1回	気軽に来やすい	なんとなくあるような気がすいない			増えた	NPO法人カラリ/(room-k/ ヘンテコまほうが 軽井沢horizon internation GOD HANDS project(様) 様は皇頭を寄うのが得意で大好き!!けれど、マンションの自 子どもが一人で過ぎるようで 絶え間ない体験に感謝申し上げます。 非現がおり、是迫がないと進えないので参加できないことも多いのですが、今年もたくさん観に行きたいです。 楽しくお話へやいします。
2023/01/12 11:05:17	13～15歳	女	上田市内	4回以上	知らない世界に出会える	ある	いる	シネマクラブで知り合えた方る こんな世界もあるんだなぁと	ある	周りに干渉され過ぎるのは苦手なものの、1人でいることが好きな訳ではなかったので、				極えい映画館で参加させていただける所が合っていたのだと思います。また、が	増えた	何で挙げられてるものはダンス、語学、ボランティア(+取物)と幅れあ	ある場所 看護教育程度の知識の変容は必要かと思うので、学習時間を作ってもらえればありがたいかなと思います。かと言ってまずはこの時間はとしてまうはまたけきさくなる方がおってくと思うので、中、高 また、心理さんやスクールカウンセラーさんに入ってもらって頂け等なんかをクリアしている方のアドバイスをもらったりワークができる場あが良れば嬉しいです。
2023/01/12 19:45:16	50代	女	上田市内	4回以上	知らない世界に出会える	ある	いる	映画館という発想がすごくおい		2.3回	人に会える	なんとなくあるような気がすいない				中間教室	
2023/01/15 7:45:47	7～12歳	男	佐久市	1回	周りを気にしなくてもよい	ある	いない	ない		1回	気分転換になる	なんとなくあるような気がすいない				パソコン、水泳	勉強やパソコンを教えて欲しい （参考にしたいので他のカがどんな事を記入しているか知りたいです）
2023/01/17 12:58:25	13～15歳	女	上田市内		知らない世界に出会える	なんとなくあるような気がする		まだ日が浅いのでなんともしある		本人が興味を示した為							
2023/01/18 12:38:03	7～12歳	女	上田市内	1回	知らない世界に出会える	なんとなくあるような気がする	いない	ない							変わらない	アートイベント	
2023/02/07 8:02:36	40代		上田市内	4回以上	知らない世界に出会える	ある	いる	世界が広がった	ない						増えた	一緒にご飯を食べる	上田市立美術館子どもアト 話しかけやすさ

うえだこどもシネマクラブ&SAMUcafe　認知度調査アンケート　22

Q1.うえだこどもシネマクラブの活動をご存知ですか。
・知らない　3
・知っている　19
a.ご自身が参加したことがある　1
b.ご自身が参加したことがない　17
　無回答　1

Q2.SAMUcafe の活動をご存知ですか。
・知らない　11
・知っている　11
a.ご自身が参加したことがある　0
b.ご自身が参加したことがない　11

Q3.送付・配付させて頂いたうえだこどもシネマクラブ・上映会のチラシの周知状況を教えてください。
・学校の掲示板に掲示　5
・チラシを生徒に配布　5
・不登校など対象生徒へ個別に案内　8
・不登校など対象生徒の保護者へ個別に案内　6
・スクールソーシャルワーカーなどへの情報共有　2
・SNS 等での情報発信　0
・その他　5
　特別支援学級児童へ配布
　特支担任および、3 年生以上の学級担任に配布
　希望者に配布
　各クラスに配布、担任の判断に任せている（2 名）

Q4.上記 Q1.Q2 で「知っている」と回答された方にお聞きします。生徒に参加を呼びかけたことはありますか。
（1）シネマクラブ
・無回答　1
・呼びかけたことがない　12
・呼びかけたことがある　9
a.1 人以上が参加した　4
b.誰も参加しなかった　2
c.わからない　3

→呼びかけなかったと回答された方：理由はありますか。
a.本人の関心が合わないと感じた　1
b.活動内容がよくわからない　2
c.活動団体をよく知らない　1
d.成果がよくわからない　0

e.その他　7
　距離があり困難
　不登校傾向の生徒・保護者に様子を見て紹介している
　該当者がいない
　積極的にアプローチする必要の子がいない
　対象児童がいない（2 名）
　チラシにより判断をしてもらうため
f.特にない　4
　今は必要としている子がいない

(2)SAMUcafe
・無回答　4
・呼びかけたことがない　16
・呼びかけたことがある　2
a.1 人以上が参加した　1
b.誰も参加しなかった　0
c.わからない　1

→呼びかけなかったと回答された方：理由はありますか。
a.本人の関心に合わないと感じた　2
b.活動内容がよくわからない　4
c.活動団体をよく知らない　1
d.成果がよくわからない
e.その他　2
　距離があり困難
　対象児童がいない（2 名）
　チラシにより判断をしてもらうため
　まずは、シネマクラブへの参加かと思いました。映劇に行けばカフェの様子もわかると思いました。
f.特にない　4

(3)こんな情報がわかると、呼びかけやすいといったご希望があればお書きください。
・参加している子どもの様子（市教委への報告を 1 ヶ月毎にする関係で、出欠状況）
・特にありません
・毎月、チラシをありがとうございます。教育関係者向けの活動説明会があったらいいなと思います。
・無回答　19

Q5.ご紹介いただき参加した子どもたちや保護者にどのような反応・変化がありましたか？
・無回答　14
・表情が明るくなった　1
・興味・関心事を話すようになった　2
・学習・情報収集への意欲が高まった　2
・親子間の会話が増えた　1

・保護者の安心感が高まった　1
・登校が増えた　2
・変化はない　2
・反応を把握していない　1
・その他　1
　映画のよさを教えてくれた

Q6.社会で孤立しがちな子どもたちにとってどんな居場所活動が充実していくとよいと思いますか？
・無回答　11
・落ち着いた空間でゆったり話を聞いてもらったり、何気なく自分をいかす活動ができるなら色々考えられそうですが…
・職場体験的な事業の受け入れ先が増えるとよい
・岩石・化石収集、植物観察など専門性の高い方の支援により、ハマる子どもがあれば、興味も広がっていくかもしれないと思います。
・他者と関わる場所であれば（例）食堂関係であれば、他者との関わり、そして食事もできてよい（子ども食堂）
・自由な時間に行き、好きな活動（興味・関心がある活動）ができる場所があったら良いと思います。
・無理なく、自分のペースで、あまり目立たない裏方的な居場所活動。
・一人～数人でできる活動の場。内容は興味関心に合わせて何でもよい。
・ボランティア活動の場は、有効かと思います。
・興味関心のある事を思う存分できる場の提供
・保護者も悩んでいると思うので、保護者同士が語れる場↑これと同時でもよい
・学校では挑戦しづらいことにチャレンジできる場があるとよいのかなと感じています。（楽器など）
・少人数（時には個別）で対応する拠点。このニーズに対応し、安心して過ごせる場所が増えるといいなと思います。（Learning for ALL のような…）

Q7.その他　ご意見・ご感想・ご質問・要望などありましたらお願いします。
・無回答　16
・良い企画をありがとうございます。
・素敵な映画をセレクトされているので、都合があえば見に行きたいと思いますが、利用者の制限はあるのでしょうか。
・いつもあたたかく迎えて下さってありがとうございます。直井さんはじめスタッフの皆さんに感謝です。またうかがいます。
・大変、ありがたい支援に感謝しております。
・先進的な取り組み、すばらしいと思います。
・学校職員としては、不登校傾向の子どもたちが、学校に登校できるように、個々に対応しています。しかし、とても難しい現状です。学校以外の居場所の必要性を感じています。現場の職員が、シネマクラブ等の活動を知ることが大切だと思います。

Q8.ご回答者の所属する学校名、または機関名をご記入ください。
・無回答　3
・田中小学校
・丸子中学校

・東御市立滋野小学校
・上田市立城下小学校
・北御牧小学校
・御代田北小学校
・浦里小学校
・依田窪南部中学校
・東御市立東部中学校
・御代田町立御代田中学校
・本原小学校（教頭）
・東御市立北御牧中学校（教頭　松澤清市）
・小諸市立美南ガ丘小学校
・塩川小学校
・上田市立神川小学校
・上田市立豊殿小学校
・軽井沢西部小
・上田市立傍陽小学校
・上田市立神科小学校（特別支援教育コーディネーター　竹内千香）

欄外に記入あり
・いつもありがとうございます。
・よろしくお願いいたします。

土肥「ヨーロッパシネマで子ども映画教室のことを発表したらすごく羨ましがられた。なんでかというと「自分達は午前中の映画館を子どもたちで埋まっている（埋めている）。9月になると旅行代理店のように学校へ電話して「こういう映画やりますけどどうですか」って、みんな入ってくるんだけど、結局、白黒の映画ってだけで「えー」って来て、まるで拷問を受けているようにいやいや連れてこられて、見せられて、ようわからん、みたいな顔して帰って行くからせっかく子どもたちに映画を好きになってほしくて見せてるのに、なんだかな」って言うわけ。「それに比べてこの子ども映画教室の子たちは楽しそうにしていて羨ましい」って言うから、「いや、私たちはすごい羨ましいよ。制度ができてて、システムができてて」私も映画館主として行ってたからね。埋まらない時間を団体が来てくれて、それも国とかいろんなところから助成金をもらって、劇場の身入りもあるし、学校も映画教育って言う意味で子どもたちは教育を受けて、それも授業の中でやるから」

直井「カリキュラムであるってことですか？」

土肥「カリキュラムの中に。フランスは手を上げた学校の先生の子たちは行けるわけ。そう言うのが全国的にできていて、イザン・ファン・シネマかな？エコール・エ・シネマか。小学校と映画みたいな、いろんな小学生バージョン、中学生バージョン、高校生バージョンみたいな。広く浅く小学生に見せる映画リストって言うのがちゃんとあって、その映画リスト誰が決めてんの？って気になるじゃないですか。評論家でも決めてんのかな？と思ったら、館主が決めてる。ほとんどが館主。他にも先生とか監督とかも入ってるけど、大多数は映画館主。つまり普通にやって入るものならそこに入れなくていいわけ。これは見せたいけど、これをやると劇場潰れるんすよみたいなあるじゃないですか。その太鼓判を押してもらった映画、例えば『100年と希望』としましょう。『100年と希望』を高校生に見せたいってなったら『100年と希望』と言う映画に太鼓判が押されて、この映画を配給する会社、上映する劇場にお金がでます。それがセーエヌセー。それが今是枝さんや？さんがやろうとしているセーヌ・？映画教育に対すお金の出し方。その原資は、トムクルーズの映画の入場料金から何％。全ての映画からお金を集めて吸い上げて教育とかミニシアターの作品…。私は基本作品なのがいいと思ってて、この映画館にじゃなくて、この作品を上映するなら君のところにこんだけあげるよ。この映画を配給するなら、配給大変だろうからっていう。作品主義なのがすごくいい。その中のセーエヌセーのなかの映画教育の部分の中に、小学生と映画館とか高校生向けとかそういうのがあって。そこはちゃんとお金をもらってるから私は羨ましいと思った。でも現場には現場の悩みがあって。でもその時に「ちょっと待って、それはちょっとした工夫で楽しいものになるのに」って思って、それはワークショップで、映画は見る前は前情報がないくらいがよくて、観た後にこの映画をどう感じたかという話をみんなでするとか、ワークに落としこんでゲームにするとか、それを今、やってるんだけど。小学校回ったりしてるのは。もし、ヨーロッパシネマで来てた人たち、そんだけ子供たち来るんだから、作品ごとにワークをみんなで作って、それ共有すれば、映画見て、見終わって、「ああ、白黒でなんかよくわかんなかったね」じゃなくて、例えば「今の映画なのになんで白黒なんだろう」とか、なんでもいいわけ。映画についての知識はいらない。知識を与えるんじゃなくて、どういうふうに見た？　例えばめぐちゃんが見た映画と私が見た映画は違うものになってるはず。その違いを「ええ、そんなふうに見たんだ！」っていうのでいいわけ。「私はこういうふうに見たけどそういうふうに見たんだなるほどね」で次に映画を見た時にああいう見方があったらみたいな感じで見たりとか、そういうちょっとした、そのためには作品をよくよく見て、この映画だったら何をするかなって。「霧の中のハリネズミ」を私たちは見るときに、結局私たちは話し会った結果、「霧の中シート」っていうシートを作ったんですよ。「赤い風船」の時は、赤い風船のタイムラインを3mの模造紙を、タイムラインにして、映像を撮って、ーーとーーが出会う、仲良くなるとかバスに乗るとかやって、それをタイムラインで、例えば「何がでてきた？」「馬」「犬」とか「青い風船」とか「パン屋さん」とか、そういうの全部「どこにでてきたっけ？」って言って貼って行くんですよ。ポストイットに書いたものを、「映画の中のどこにでてきた？」って言って貼っていく。最終的に時間を追いながら、お話を、インプットしたものをアウトプッ

トする。その時に、「赤い風船」の時は、「赤い風船」の気持ちを、風船カードを作ってそこに風船の気持ちをどんどん書くわけ。「怖いよ」とか「助けて」とか「パスカルを助けなきゃ」とかそれを全部書いて、その気持ちはどこのシーンだったか貼ってくださいって言って貼って。その後で、「赤い風船は何か話をしましたか？」「自分の気持ちを言いましたか？」「言ってない」じゃあ、その「助けて」とか「助けなきゃ」って気持ちは誰のものでしょう？あなたのものなんですよっていう。その映画って実は、自分も見てる人も作ってるっていうことを言いたいんですよ。それは「赤い風船」はピッタリだったわけ。赤い風船の気持ちなんてどこにも書いてないけど、みんなは感じたよね。それはめぐちゃんと私では違う。おんなじシーンの、おんなじ風船だけど、怖い・助けてと思うか、なんとかしなきゃとか逃げなきゃって思うかちょっと違うじゃない。それは本人の違いなんだよね、みたいな話とか。『霧の中～』の場合はタイムラインが意味があんまりない。どっちかっていうと右も左も上も下もわからないホワイトアウトした状態なので、それで霧の中のシートを作って、ぽんと霧の中に現れる感じじゃん。カタツムリとか象とかみたいな影、ふわふわっとでてくる感じとか、どこにでてくるとかわからない感じだからみんな好きにして、大きな木があったよねとか、大きな木どこにするとか、正解がないから。みんなで適当に。こぐまの家はどこだ？霧の外だから。だけど、こっちとこっちにあるとは限らない。ここかもしれない。霧の中でぐるぐる回ってたからここだったかもしれない。そういうのはもうただの想像で、作品によって、何をするのかは、ずっと話し合って何をやったらいいかっていうので、そういうふうに今度は『おはよう』をやるんだけど、『おはよう』を一時間半見た後で、どうしましょうってなって。『おはよう』の場合は人物の関係性とか、声優がおもしろい。私が生まれるちょっと前くらい、60年くらい前の映画なんだけど、そのころの言葉とか、もうわからない。押し売りとか、「ですってよ」みたいな言葉遣いって山手の奥さんでももう使わないじゃないですか、そういう言葉の変遷みたいなもの面白いし、「楢山だよ？」とかね？わかります？おばあちゃんがやんなっちゃうねって。そういうセリフのふきだしを使って、どんな人が出てきましたか？人の付箋を使って、映画地図、相関図とはちょっと違うんだよね。主人公の家族、◯◯ちゃんの家族がこの辺りの文化住宅に住んでて、そういう地図を書きたくなるんで、そういうのを開発するわけですよ。ワーク開発が一番大変なんだけど、ワーク開発をして、今だったらそれを小学校の体育館で、すごいおっきなスクリーンで。」

直井「風船のやつは見ました。赤い風船、いいですね。」

土肥「赤い風船、今上映できないんですよ。（映像？を見ながら）」

直井「これは何日？」

土肥「これは2日です。ここまでは1日目です。映画をみて、赤いボールの気持ちを考えたものを撮る、編集までしてというのを1日目にやって、2日目に繋いだやつをみんなで観る」

直井「タブレットは学校のやつ？」

土肥「全部レンタルして、アプリを入れて、」

直井「1日でそこまでいけるんですね。これでもプログラム開発がやっぱりあれですね」

土肥「そうですね、ネックです」
直井「これはもう一つの教科書と同じレベルのものですね」

土肥「鑑賞ワークショップはちゃんとどういうワークにするかっていうのをやらなきゃいけないけど、きっとこれまでものすごいやってきてるから、いっぱいあるんだけど、いつも、それをまたやるってことをしない。今やっと、学校のやつは同じこのパターンでいくっていうふうにしてやってる

けど、学校が違うからね。たまたま『赤い風船』が使えなくなったんで、『霧の中のハリネズミ』をやったり、『おはよう』にしたのも、『赤いボールの冒険』っていうさっきのは、やっぱり制作に2時間くらい使うから。今度、子供の数が少ないところ、僻地・離島っていうブロックなんですけど、全校生徒で28人とか、そのくらいだとちょうどいいんだけど、90人くらいまでやったことがあって、90人だとヒイヒイなのね。それが200人単位、250人とかでやれるものをやってくれないかって話があって、そっちの方がメインストリームだからそっちをやれるようになってほしいって言われちゃって、「だったら制作無理ですよ」と、鑑賞ワークだけならバッチリだけど、それもいままでみたいな5人くらいでペタペタやるとかっていうのも一人大人がつかなきゃいけないから、すごい人数必要になっちゃう、そんなにいない。そんなにそれでみんなで移動するのも大変だし。結局、ちゃんと映画を見せるってところにフォーカスしたいなと思って、今までは『赤い風船』が35分とかでしょ、『霧の中のハリネズミ』は10分とかでしょ。1時間半の『お早よう』をちゃんと日本の映画を見せようと。あと何もする気なかったんだけど、「なんか撮ってなんかしてくれ」みたいな、それで無理矢理だけど、切り返しっていうのを。「おはよう、いいお天気ですね」を2人で撮って、それをつなげると二人が会話してるように見えるっていう。その後は何を撮ってもいい。二人の関係をまず決めて、この人とこの人はどういう人なのか決めて、この人はどういう気持ちか、それは鑑賞ワークの時にやることなんですよ。映画の中にでてきた、お父さんと主人公の少年の関係、お父さんは子供のことをどう思ってて、子供はお父さんのことをどう思っているのか、気持ちの矢印みたいなのをやるんだけど、それと同じことを決めてから、「おはよう」のあとは「おはよう」の言い方も感情によって、随分あるから、その後はどういうお話にするかは完全に自由にしてやってみた。大人でやってみたらすっごい面白くて、速攻で出てきたのが「宇宙人」子供とおんなじなんだって」

直井「鑑賞の部分ですね。それがないと後半の部分が」

土肥「そこは絶対つなげたかったし、基本的には映画を鑑賞って何？　例えば『霧の中～』の時は、諏訪さんが言ったのが、「やっぱりこの映画は理解するとかじゃなくて味わうものだ」味わう・・・どうすると味わえるんだろう。でもそこで出てきていいなと思ったのが、白い馬が出てくるじゃない？『霧の中～』では、白い馬ってすごい幻想的に出てきて、その白い馬が主人公、」

直井「動きが特徴的じゃないですか、あの動きが面白くて」

土肥「あの白い馬が（主人公？）にとってどういう存在なんだろうっていう、質問をすると、本当にいろんなことを子供たちは考えて、話してくれて、」

直井「そのワークショップ、見たいな。土肥さんたちのワークショップってパッケージというか、そっちのワークショップもしたい、ファシリテーター養成ワークショップみたいなとか。そんな場があったらすごい楽しそうですね。」

土肥「やりますか」

直井「需要あります」

土肥「『霧の中～』が来年の3月で切れるんだって。今のうちですよ。どっかで予算とって呼んでください」

直井「ワークショップの場。・・・作品の提供と場だけはやってるけど、そこにプラスアルファまで今全然、手が回らなくて、もう見た後の感想言い合うっていうのも流れで惰性的にやっちゃってるだけなんですよ。でも今、土肥さんの話聞きながら、そこを丁寧にやんないと学びにはつながっていかないなと」

土肥「いいと思うけど。あんまり、大変だもん。だから、それこそ、パッケージにして、呼んでもらって我々がやる。文化庁で作ったものがあるから、それを持って行ってやる。もしくは、それでこのやり方で同じ作品でも。来る子が同じだと違う作品でやるじゃない？何度やっても面白いと思うけど、できれば違う映画でやってみたいし、そういう簡単に・・・」

直井「シネマクラブなんてやってること単純なんですよ。映画館においでよということをどう見せるかというところと、伝わりやすくっていうところ。教育委員会とかと喧嘩しても良くないから、そこをデザインの力を借りてすっと入っていく。でも、学校教育ってなると学びに繋がるっていうキーワードで先生たちは納得するから」

土肥「先生たちにあわせなくていいんじゃないです？」

直井「そうなんですよね」

土肥「先生たちは映画のプロでもなんでもないじゃない」

直井「そうなんですよ。そこはそうなんですけど」

土肥「事前学習しないでください。何にもしなくていいですよ」

直井「予習とかしないでください」

土肥「ワークショップ中の子どもたちに色々言わないでください。先生も楽しんでくださいって言ってやってる。あんまり、これによって何が学びになるかみたいなことはあんまり聞かれない。ただ最初の日とか、前日に校長室とかで話をするんだけど、その時は何も言わないことがどれだけ子どもたちが伸び伸びと、特にこれは正解のないものだから見守っていることがとても大事でっていう話をして、それで成果物ができるじゃない？模造紙に貼ったりとか、それを先生には見てもらって、その時は必ず先生は言葉遣い「死ね」とか書いてあるから「お恥ずかしい」っていうんだけど、それ、何も悪くないっていうことを言ってあげる。とにかく子どもたちを褒める。うちの子だったらね、見てもらったら嬉しいからね。反応がいい時はもちろん、それは言うし、あんまり反応がない時も、なんか全然反応なかったから「え」って思ったけど、書いてもらうとこんなに考えるんですよね。高学年はゲラゲラ笑ったりはしないけど、人の目が気になるから。ちっちゃい子たちはわあっとくる。先生たちを納得させる必要はない気がする。教育委員会とかで、そういうことが必要になってくるのってあるよねと思うし、先生の寄り合いみたいなとこに行ったことあって、そしたらすっごい言われてこっちに合わせろみたいな。学校側に合わせてもらわないとやっぱりなかなかその壁は乗り越えて来られないよね、みたいなこと言われて」

直井「えー。その姿勢をまず！ですよね。どこも一緒なんですね。地域柄もあるかなと思ったけど」

土肥「それで、わちゃわちゃやってるうちに文化庁の話が、やっと公教育にするっと入れちゃって、まあ上からの訳だけど、その採択されたときに来てほしいって言ってくれてる訳なので、手を上げてくれてるところに行ってるから、お前のとこでやれって言われてる訳じゃないから。色々ある中で子ども映画教室を選んでくれてるから、そういう意味ではやりやすいよね」

直井「やりたい現場の先生多いですよね」

土肥「そこでわかってもらえるようにとか、一番いいのは先生を配置して、チームに入ってもらうんですよ。チームに入るのが一番。時々行って、あれ？先生が全部やってるな？みたいな。「先生、子どもたちがやるものです」って言うと「あー」って笑。でも、大抵子どもたちがニコニコでやってくれるから、先生たちはそれを見て、感想を最後に発表するんだけど、最初のうちは先生にあてなかったんだけど、先生からも聞いたりして。みんな、「驚きました」ッていうのが多いんだけど、」

直井「子どもたちの様子を見て？」

土肥「子どもたちの様子を見て。やっぱりね、ちょっとした変化が起きるね。いつも同じ、この子はこういう子って先生も思っているし、子ども同士もそういう出来上がったものがあるんだけど、初めて何かをみんなで作るってなった時に、意外とこの人演技上手いとか、この人カメラのセンスあるとか、そういうことがチラッと見えたりすると、なんか変わる」

直井「立ち場超えるのも面白いですよね。感想言い合うとかって、先生と生徒が同列になれるっていうか、あの瞬間結構好きで、感想言い合うと別に教える側とか関係なくなるんだっていうのがすごいよくわかるから、あの瞬間すごい好きなんですよね」

土肥「そうですよね。子ども映画教室が――した時に、構造。ワークショップの佐伯さんっていう先生がいて、先生のが、これまさに映画教室ですよねって、送ってくれて…」

直井「土肥さんたちって独自にプログラムを開発してるんですか？そういうこう参加型の」

土肥「私、青学でワークショップ・・・」

（何か見せてる）

直井「シネマクラブだと抱えてるものがネガティブな子がいて、「みんなと仲良くなりたいけどどうしたらいいか」みたいなことなんだけど、それに映画って可能性がある気がするんだけど、まだ到達できてなくて、やっぱ同じような」

（何か見てる）

直井「映画鑑賞のファシリテーター養成講座みたいなのいいですね、じっくり私受けたい。もしあれば」

土肥「人を作っていかないと」

直井「そう。本当にそうなんですよ」

土肥「映画教室も若返り作戦で・・・。加齢化が進んだの。でもまだ学生に間違えられる」

直井「雰囲気が笑」

土肥「どういうふうに受け止めれば・・・」

直井「絶対プラスですよ！」

土肥「この前、『春原さんのうた』の杉田さんに講師やってもらって大田区からのあれで、久しぶりに東京でやったんですよ。若返り作戦で学生がいっぱいきました。日芸の3人。」

直井「一人、土肥さんとこに送りたい学生、今年高校卒業して桜美林に行ったのかな？」

土肥「うちの（名前）が桜美林です。コミュニケーション論とかっていうリベラルアーツ。それで五十嵐コウヘイさんがいる」

直井「子ども映画教室始めた頃の子たちが高校大学生になってますもんね」

土肥「うちの24歳になる息子は子ども映画教室で「親の躾が問題だ」って映画を撮りました。何それ、すごく感じ悪いって笑。あっという間に子供が大きくなって、小学生で諏訪さんのとこに来てた子が大学生」

直井「確実にみんな、成長」

土肥「なので、スタッフも加齢笑」

直井「続々と人材輩出」

土肥「でも、戻ってきますからね」

直井「（子供映画教室は）始まって何年ですか？」

土肥「18年です」

直井「その子たちの子供がくる時代になってきますね」

土肥「最初の頃スタッフだった、シネモンドのスタッフとか、ボランティアで来てた子がお母さんになって、来てます。随分前から。最初始めた頃は「自分の子供ができたら入れたいからそれまでやってね」って言ってたんですけど、そんないつになるかわからないと思ってたけど、無事に」

直井「続けることのモチベーションを上げながら、財政を確保しながらっていうね。トータルでやることは必要だけど、中身が充実してるから、やっぱりそこはすごいとしか言えない」
土肥「でも、あれじゃない？全てが揃っている気がする、上田は。場所と人と金。場所が整い、人が整い、お金が手に入ったらできるかな。金は最後だったんだよね。お金は後からついてくると思って始めちゃったんだけど、続けるためにはボランティアじゃダメだって法人化したり、文化庁の事業とってきたりして、でも、やっぱりここまで来てたら、何を・・・。私の方が羨ましい。（何かを見せながら）この人たちの並びがいいなって」

直井「それは確かに」

土肥「財産だよ。これは地元というか郷土があるからなんですよ。子供映画教室は強度がないんですよ。この場所っていうのがない。で、自分ちの近くと考えたけど、渋谷っていう匿名性が担保された場所、ここだと誰でも来られる、誰かの場所じゃないわけ。ここ（？）は誰かの場所の場所なんですよ、そこにいる人たちはここ（？）集まれる。渋谷の場合は地元的なことはできないけど／行政繋がるなら大人な人が必要。大人がいないからこういうとがちゃんとできないんですよ。／場所を貸してもらってるところとかは、指定管理者」

直井「報告書が充実してますね」

工藤「うち両親が離婚してるんですけど、妹が学校に行けなくなっちゃったんですよ。朝起きると気分が悪いって言って。家庭環境の影響があったと思うんですけど、理解がないと何怠けてるんだってなっちゃうでしょう？体に出る訳ですよね、気持ちとかストレスが体に出て、体が反応するから気力とかがなくなっちゃうでしょう。映画とか、ジェットコースター乗ったりすると出るっていうじゃないですか、ドーパミン。映画見て、ドーパミン出して、明日ちょっと気分良く1日過ごせてもらえたらいいのかなみたいな。」

直井「そう。すぐにどうこうっていう話じゃない。その子の人生の長いストーリーの中の、ほんの一瞬だと思うんですよね。それが行けなくなっちゃったっていうネガティブな感情で、それが引き金になっちゃうみたいなのは、多分多い気がしていて、その体験はポジティブにっていうか、行かなかったからこんな体験できたよね、みたいな」

工藤「自分はそういう活動している訳じゃないけど、ーー中学校の、校長先生になった人が、その先生が「斜めの関係」っていう話をしていてよく第三の居場所っていうけど、斜めの関係ってことで、学校だけじゃなくて（コミュニティ？）と学校が連携しようって活動を言われた先生がいて。本もすごく出されていて、すごく有名な方」

直井「この先生も映画を？」

工藤「いや、映画は。けど、子供の世界ってすごい狭いじゃないですか、学校、先生、友達、家、しかない。友達もーーいう友達とかいないでしょ。学校の友達しかいない。もし、スポーツとかやってたら、そこにも多少は友達がいるかもしれないけど、結構彼らの世界って狭くて閉じてて」

直井「本当そうですよね。確かに、斜めの関係。話ちょっと戻っちゃうんですけど、映画の中に飛び込める感覚みたいなの、今の子はそれがゲームなんですよね。起きた時にゲームをオンにして、その世界の中にいて、ゲームの中で生きてるみたいな。そんな状態になっちゃってるから。それってもう個じゃないですか、個人で。その他者と関わるってことが、ひきこりとかも、そうなんですけど、そんなに困らないんですよ。食べるものがあって、ゲームがあって、やればなんとか生きていける。ケータイもね、今」

工藤「映画っていうのは、わざわざ行って、二時間暗い中で大きいスクリーンの中に没頭するけど、ゲームはもっと手近で、映画は終わったら出てこなきゃ行けないけど、陽を浴びたら現実に戻るみたいなのあるけど、ゲームは永遠ですよね」

直井「そのギャップなんですよね、現実は現実であるよっていうところを気づかせてくれる訳ですよね。ゲームはそれ自体がバーチャルなんだけど、日常。映画はやっぱ全然違うなと思って、それは映画館っていう装置もそうだし、現実と呼ばれるものに引き戻してくれるんだけど、ゲームになっちゃうと地続きで、現実とゲームがわからなくなっちゃう」

工藤「上田で（外に）出てきて、映画を見てくれるだけでも第一歩だと思うんですけど、感想を話し合ったりするの、ちょっとまだハードルが。そのレベルの人も、話したいって人もいると思うけど、その手前の人もいるのかなって思うと、もしかしたら参考になるかもしれないのが、私会社を辞めた後に、フランスとイギリスに行って映画教育に携わっている人たちを訪問したんです。ヨーロッパシネマっていう団体があって、そこの紹介で刑務所の子供たちに映画見せてる団体の人に会ったの。映画を見た後に映画批評を書くんですって、その映画批評をコンテストみたいにして映画のプロがその批評を見て、賞を出したりしてて、その授賞式みたいなのとか、1番になった作品を上映して、そこで表彰式とかしてる団体がフランスにあった。土肥さんたちは割と作る部分に力を入れてるんですけど、土肥さんのところにナガイさんってい人がいて、ナガイさんは鑑賞に力を

入れたいって思っていて、映画を見た後に対話をしていくってことを彼女を中心にやってる感じ。子供映画教室で対話をやるときはナガイさんがきたり、ナガイさんが個人的にどこかで頼まれたりしてやることもあるけど、批評は個人で書けるからいいのかなって、でも見たものはアウトプットしていくみたいな」

直井「言葉で喋るってことが苦手な子がやっぱり多いから、書くっていうのは一つ、そっちのがやりやすいってかもしれないなと思いました」

工藤「刑務所の人たちは短編を見てるらしいんですよね。短編を見せてるって言ってて、短編っていう形のものを生まれて初めてみる子もいるらしくて「これも映画なの？」って言われると言ってました」

直井「確かに。短編とか、オムニバスってなかなか日常で生活してると見ないですよね」

工藤「土肥さんたちが『霧の中のハリネズミ』を使ってWSをしてる背景としても、短いので繰り返し見れるんですよ。1回目に見た印象と2回目に見た印象がどう違うのかみたいなところを対話していくっていうのは、ありますね。私もちょっと対話っぽい感じで、私がやってるのは、ポスター、チラシを作りましょうっていうWSをやってるんですね、映画を見た後に。まずみんなでどんな人が出てきたのか、どんな話なのかっていうのをチームに分かれてポストイットで書いてもらう。チラシっていうのは、必ず入ってるのが映画のビジュアルであって、タイトル、コピーっていうのは書いてある。裏側にいくと見どころとお話が書いてある。それをチームで話し合って、見どころは何か、どんなお話なのかを書いていく。『ソング・オブ・ザ・シー』でやったんだけど、ソングだけ1回しか見れなくて。2回目にやったときは『霧の中～』で、何が出てきた？って動物が色々出てくるんですけど、勝手に想像して「キリンが出てきた」って言ってましたよ（笑）じゃあ、見てみようみたいな感じで2回目を見るっていう。2回見て友情の話って言ってましたよ」

直井「それ何年生くらいの？」

工藤「小学校3年生以上というふうにしてワークショップやってました。四国の高松に、ちょっと違うけど入江さんっていう直井さんみたいな人がいるんですよ。映画館はないんですけど、上映会をしていて、その入江さんがワークショップやりたいって言って東京に会いに来てくれたんです。それで頼まれて、ワークショップをしに行きました。映画のスチール写真みたいな場面のデータを配給会社が持ってるので、それをプリントアウトしてもらって、それを子供たちが切ったり貼ったりしてもいいし、書いたりしてもいいってしました。2016年と17年にやりました。監督の写真とか貼ってたチームもありました。『歌と海の冒険が今はじまる』って書いてあるんですけど、素晴らしいんですよ、コピーが。これは地元のケーブルチャンネルに告知してもらいました。これは二つにパートが分かれてて、ワークをやってチラシを作って、その後に上映会をするんです。その上映会は一般のお客さんを呼んだ上映会なんだけど、子供たちがチケット売ったり、もぎりしたりとか、パンフ売ってくれたりする。それで上映会のお知らせのためにケーブルテレビが来て、子供たちが作ってくれた（チラシ）を市役所のコーナーに貼ってくれたんです」

直井「それいいですね。それ、できそうだ」

工藤「自分にとっても思い出深いワークショップです。アニメーテッドラーニングという活動をされているオフィスアッシュという会社の伊藤さんがやられているんですけど、デンマークで開発されたプログラムで、日本でそれをやろうということで活動されているんですね。子供たちが自分の物語をアニメーションにする。デンマークでアニメーテッドラーニングを開発された女性が日本で講演するということで誘ってもらったんですけど、映像を使った学習はそれなりに行われているんで

すけど、自分の家族を紹介するビデオを撮ってきてくれっていうと、移民の多い地域があって、そういう子たちは家族を見せることを恥ずかしがって、うまくいかなかったんですって。それで人形とか紙とか、粘土とか、メタ化することによって自分の物語を語れるということがあり、これいけるって思って本格的にプログラムを作っていったそうです」

直井「それすごい楽しいですね。今、一人来てる女の子、大学生なんですけど、抱えてるものが大きくて・・・。映画館だから基本的に支援ではないし、でもここだから話せる、病院の先生もお母さんも知らない話をポロポロっと話してくくれるようになってきて、これはどうしようかなといつも思ってたんですけど。彼女の話を聴きながら私がポストイットに描き始めたら、今度それを自分自身でやるようになって、楽しかったことはこうとか、アウトプットし始めたの。日常的にやり始めて。この子の場合、支援者が多くて、逆に自分で決めるということができなくなっちゃって、すごい負のループに入ってしまって。その失敗も大丈夫だよって、ほら映画なんて失敗ばかりじゃないですか」

工藤「実際の人生も失敗ばかりでも意外となんとかなるんですよ。お金と時間と気持ちの切り替えでなんとかなります」

直井「多分、そこに至るプロセスなんですよ」

工藤「自分が子供だった時より、今の子達の方が正しくあることをすごく求められてる気がするんですよね。みんながそれに応えようとしてドツボになってる感じがするんですよね」

直井「そうなんですよね。こんなに失敗を恐れるかっていうこととか。あとその気持ちの部分、自分の感情の部分でも「こんなことを思ったらだめだ」って、それって人間ってもっと毒を持ってるものじゃないですか、毒吐けないって、そういうのがすごい抑えられてるんだなっていうのがすごい思って。今、その子と、物語にして。今この話を聞いて、自分の物語を何かにするって」

工藤「メタ化の良いところはね、何が問題なのかわかるとあとは解決するだけなんですよね。それで問題に気づくって外に一回出して、高いところから問題を見るという構造で、こういうものをアニメーションにして、自分もそれを見た時に見える角度がすごい変わるはずなんですよね。だから、紙芝居でもいいんですよね。土肥さんたちが映画作るときに一番最初にやってたんですけど、写真撮ってくるの。それにどんなストーリーがあるか、アニメ作るっていくつか手法ありますけど、粘土でもいいし、絵を描いてもいいし、あんまり難しく考えないで、自分の物語にあってるって思う写真を撮って自分でナレーションをつけて動画にすることとかも簡単にできるんですよ。私アニメつくるワークショップもやってて、大好きなんですけど。フランスで関節が動く人形があって、一枚ずつ撮ってきて作りました。ストップモーションスタジオっていうアプリです。外に書き出したりもできるので。コマ撮りなんで一枚ずつ撮ってます。」

（アニメーション見てる）

直井「これいいですね。映劇の予告の前とかに作ってもらえたら」

工藤「それいいですね」

直井「人形も今みたいなのだと、段ボールとかでもいけますかね」

工藤「ちょっと厚みがないとベロベロになるので。あとは、食品の上にかけるペンがあるので、それを使ってジンジャーブレッドに好きなように模様描きました。インド映画見て、サモサ作ったこともあります」

（映像見てる）

工藤「小学校3、4年生くらいになってもハサミとか上手に使えてない子いるんですよ」

直井「そうなんですよ、ハサミ、カッター使えないんですよ。ちょっと切ってってカッター渡すと「これどうやって使うんですか？」って。学校行ってないとなおさら。」

工藤「切っちゃいけないとこ切っちゃう子も結構いるんですよね。100円ショップはワークショップの味方なんですよね」

直井「手を動かすとか、そういうのを組み入れていくと・・・」

工藤「大人が本当に楽しそうにやってると子供に伝わると思うんですよね。土肥さんもね、土肥さんが一番楽しそうだもん。だから、まず直井さんがたのしむっていうのが伝わるポイントなのかなって。それで全てが解決するわけではないけど、基本スタンス「私が好きだからやってんのよ」的なのが、結構いいと思いますよ」

直井「それは、そうかもしれない。そうですね。そこって一番根本的なところで、大人が楽しんでるのが」

工藤「私、子供映画クラスを始めた時に、日本映画の制作をやっている照明さんとか、衣装さんとか、録音さんとかを順番に紹介してもらって、お話を聞きに行ったんですけど、最後に毎回「忘れられない映画」「好きだった映画」「子供時代の思い出の映画」を聞いてたんですけど、みなさん、年代が違うとはいえ、お父さんとかおじいちゃんとかに連れていってもらった映画で、子供に見せようっていう映画じゃなくて、お父さんたちが見たくて連れて行かれた映画が思い出の映画だったみたいで。自分はその時はわかんなかったけど、大人になってみたらっていう方が結構いましたね」

直井「さっきのメタ化するって、人形とか、ずっと頭にあって。リティ・パン監督っていう、あの方がやっぱり面白いし、ああいう形でなら表現できるかもって」

工藤「誰かに見せるということを前提にしなくてもいいので、自分で作って、そのプロセスをたのしむっていう感じは。そういうプログラムがあるっていうこと自体が、映画とあってるんだと思うんです」

直井「いいですね、原点ですね、たのしむっていうところの体験を」

工藤「これから、自分のところもそうですけど、食べていければいいというふうに、お金っていうものにみんながそこまで置いてないと思うんですよね。だからこそ、楽しいことをやりたいと思ってるんですよね。一方で社会とか親って好きなことをやらせてあげることよりも、いい学校にいって、安定した収入を得られるっていうマインドが変わってないんですよ。」

直井「こんな不確定な現実。現実の捉え直しもできたらいいなと、欲は色々できちゃうんですけど、そういうふうに見れることで自分の置かれてる状況は別に自分のせいじゃないっていうか、自分がおかしいわけでは全くないんだよと言いたい」

工藤「私が読んだ本に「ファクトフルネス」、世の中すごく悪くなってる。人の不安を煽る言説が流れてるとこがあるじゃないですか、でも事実の数字を見てみると明らかに幼児の死亡率は下がってるし、学校に行ってる子供の数も世界的に見れば増えてるし、交通事故の数も減ったし、人間はちゃんと進歩していってる、やったことで新しいものが起きてる部分もあるけど、悲観してはいけないって本なんですよ。事実を見てみろっていう、事実を上げていく本」

直井「それでも自分のできることを挙げていくことで自己肯定感に繋がるのとつながりますよね」

工藤「未来は流動的で不透明であるっていうのは、20年前も、100年前も今も実は変わってないんですよ。だけど、今は不安を煽るのがすごく多いから・・・。むしろ今って生き方の選択肢が広がっているはずなんですよね。だって、昔って農家に生まれたら農家以外の選択肢がなかった時代が長く続いたわけでしょ？　今って親の職業で自分の運命はこれしかないっていう人は減ってるはずなんですよね」

直井「うんうん、なのになんでこんなにみんな、「できない」と思わされちゃってるんだろうっていうのはありますよね」

工藤「たぶん、為政者みたいな人たちから見ればそれを使ってコントロールする方が簡単だからじゃないですか？　アメリカ社会は少なくともそれをすごく利用してきたと思う。だからもっと事実に目を向けようっていう。事実をもっと見る力を付ければすごく変わるんじゃないっていう気はしますけどね。私一回ナレーションで黒柳徹子さんにお願いしたことがあって、黒柳さんがおっしゃっていたのが、ユニセフの大使をされていて、今日何人生き延びましたっていうのはニュースにならないんだって、何人死にましたっていうことしかニュースにならないとおしゃってて、でも、今日何人生き延びたかっていう事実にもっと目を向けようよっていう」

直井「もっとそっちをクロースアップしていけば、割と世界は美しかったりしますもんね。悲観的なことしか映さないし」

工藤「石油が、燃料がなくなるっていうのもあと50年でつきますって言ってから20年くらい経ってるけど遅々として進んでなかったけど、ヨーロッパとかはいきなり再生可能エネルギーに切り替えたことで、2050年までにかなり再生可能エネルギーになるわけですよ。だから、言うほど人間は馬鹿じゃないよ。そんな中では日本は確かにダメな国ですけど、日本がダメなら良いと思った国にいけるよっていう、世界は広い、ちょっとしたら宇宙に行くぞ」

直井「そうそうそう。この前の『ガガーリン』ってフランスの映画が映劇でやってたんですけど、あれが私すごいよくて、たまたま見にきたお母さんも、その日、午前中に『夢見る小学校』をやったんです。結構そっち目当てで来た親御さんも多かったんですけど、午後の上映で『ガガーリン』やって、あるお母さんが『前情報なしに見てきます』って観て、子供たちは出たり入ったりしてたんですけど、お母さんがすごい感動して、『ガガーリン、すっごいよかった！』って。あれもすごい現実は悲観的なものもあるんだけど、夢を実現したかしてないかは微妙なところなんですけど、すごい良くて、こういう現実だけど夢を持つこととか、それを自分なりに表現するっていう、あの世界観すごいたまらないなって。それが実際宇宙に行かなくても、自分の中で宇宙船を再現できるみたいな」

工藤「偉大なことをやって世間から注目されなきゃいけないっていうことじゃない」

直井「そうですよね。自分の中で達成できた！みたいな」

工藤「一一道を生きていく糧になっていけばいいし、自分が幸せだったらきっと誰かを助けたりすることもできるだろうし。直井さん、なんでこういうことをやろうと思ったの？大変だと思うんですよ。自分の子供でも精一杯なのに・・・」

直井「これはもう成り行きで、成り行きなんですよ。大義があったわけでもなくて、成り行きなんですよ、全部。元々私、NGOの出身なんですよ。NGOの事務局やってて、フィリピンのゴミの処分場があるエリアで活動してた団体にいて。ずっと海外に行きたいっていうので国際協力の仕事がしたくて、フィリピンに行ったりしていたんですけど、向こうに行くと、悲惨なんだけど、みんなすごい逞しすぎて、逆にすみませんってなるんですけど。日本がどうこうじゃないなっていう思いを抱えて、ちょうど結婚するタイミングとかでNGOを一回やめて、でもなんかずっと悶々とした問い、この世界の不条理みたいなのがずっとありながら、上田で活動してて、映画はすごいキーワードで・・・。さっきの黒柳さんの広報と一緒で、国際協力の広報って悲惨な状況しか伝えないんですよ。で、世界はこんなに大変だ！っていうんだけど、実際行くとそんなことない、そんな側面ばかりじゃないなって」

工藤「生きてかなきゃいけないからね」

直井「そうそう。で、両方伝える必要があるし、それはどういう手法でできるのかなって。やっぱ伝えるってすごい難しいなと思ってて、NGOの広報しながら寄付を募らないといけないから悲惨な現状を伝えるんだけど、でもやっぱそれだけじゃないみたいなことを一緒に考えたくて、そうするとやっぱ映画ってすごい、素晴らしいんですよ。映画で受け取ることって、作り手の人の意図はあるんですけど、現地で受け取るものと同じようなすごい色んな問いかけをもらうから・・・」

工藤「映画ってすごい情報量ですよね」

直井「本当にね。全員が全員、海外に行けなくても映画なら伝えられることが多いって、それで上田で市民映画祭を始めたんですよ。その時、映劇はまだ休館してて、まだ再起動とかって話ではなくて、映画を見るなら映劇あるしなって思って会場を借りて、お母さん仲間で実行委員組んでみたいな形で、ドキュメンタリー映画を上映するような映画祭を始めていくうちに映劇が再起動したみたいな。で、再起動の時にNGOにいたからそういうNPOの申請とかやることになって、そうして理事長が侍学園っていうフリースクールをやってる長岡になって、そこで初めて会ったんだけど、映劇の再起動とかやってるうちに「うちのフリースクールも手伝わないか」ってなって、ちょうど子供たちが小学校に入って、働くかって時期だったから、それでフリースクールを手伝うようになり、そんな経緯でこっちの中間支援のNPOもあるんだけど、そっちも手伝ってみたいなことになって、この3団体に関わるうちに、休眠預金っていう仕組みを知り、その公募をかけてた団体が昔お世話になったところで、これちょっと申請いけるかもと思って、理事長に相談して映画館でこういう取り組みでって申請したら、3年間で2500万くらい事業規模になり、それがはじまった流れなんですよ」

工藤「このプログラムの最大の特徴っていうのが、中間支援団体であるというところ。映画館が自分達で始めたわけでもないし、学校が言い出して映画館を貸してるだけっていう活動でもない。そこがやっぱり強さだなと思ってるの。だから全国でやったほうがいいんだけど、そこの真ん中のコーディネートをする人が非常に重要だと思うんですよね」

直井「そうですよね。確かにそう。映画館ってどこもみんなミニシアターは上映するだけで大変だと思うし、」

工藤「昨日シネマテークたかさきのショウさん（？）って方、トップをやられてる方なんですけど、映画館の支配人はまた別なんですけど、地元の絵本を子供たちにみたいな団体さんと、もう一個別の団体をやられてて、それが障害がある方のサポートとかをやってるんですけど、そことシネマテークと3つで協働して、年に1回メルヘンとなんとかっていうイベントをやってて、ちょうど昨日電話かかってきて話してた時にやっぱり、厳しいし、チャレンジしたいけどなかなかやっぱり手がつけられないですね。高崎映画祭もやってるし、メルヘンもやってて、映画館もやってるから」

直井「それは確かに。可児市のalaっていう、文化創造センターっていう公共ホールなんですけど、社会包摂型の公共ホールっていう全国で先駆けて芸術文化の提供だけじゃなくて、劇場が今どういう役割を果たすべきかって言って、シングルマザーの世帯とか、外国籍の人とか、色んな人が居れる居場所としての機能を果たすべきじゃないかっていうのを打ち出した劇場で、毎年研修っていう形（アートマジック）で、東京芸術劇場とか、色んな公共ホールのスタッフた行政の文化の担当の方とか、フリーランスでワークショップやってる方とか色んな人が集まって、どういう役割を果たすべきか、箱としての役割を勉強する研修があって、そこで事例報告させてもらって、それをちょっとまとめたんですけど。色んな話を聞くと、公共ホールとかなら余裕があるから割と取り組みやすいけど、その中間のコーディネーターっていう話にここでもなって、そこって自然発生的に出るものなのか、でも、多分、地域には意識を持って社会課題に取り組むNPOがあったりとか、中間支援のNPOがあったりして、そこが橋渡しで連携できると・・・」

工藤「多分、地域ごとにそういう人はいると思うんですけど、それはそれでいて、映画館は映画館でいて、学校は学校であってみたいなことだと思うんですよ、そこが化学反応が起きればすぐに上手くいくんだけど。上手く繋がってないっていうのは、あるかな。でもね、私、この子供と映画のことって土肥さんみたいな人がまずいて、私が始めて、岡崎さんっていう方が小さい人の映画学校っていう活動をされていて、みたいにやってる人がいて、みんな知ってほしいから広報とかやるじゃないですか、NHKとか、私もやりたいっていう人がいると思うんですよ。10年かかってるんだけど、形になってきたところはあると思うんですよ。繋がってるから、例えば私が買ってる作品を土肥さんに貸したりとか、土肥さんが何かしたりとか、岡崎さんのところに作品を貸したりとか、そんなふうにして、ちょっとずつちょっとずつ繋がったりして、例えば岡山はすごいちゃんとやる」

直井「岡山、確かにNGO、NPOも結構盛んなんですよ」

工藤「高崎のショウさん（？）とも話したほうがいいですよ」

直井「それはぜひお会いしたい」

工藤「岡山はね、山崎さんっていう男性がいて、真庭市ってとこなんですけど、真庭はホールがあるんですよ。私たちは土肥さん寄りの、土肥さんとかは映画は教えるものじゃなくて学ぶものだと思ってるのね。山崎さんはね、ちょっと教える寄りなんですよね。コミュニティとも繋がってて、本人は監督業もされてるんだけど、映画教育に夢中になっちゃってて、多分地元なんだと思うんですけど、ご出身なのかな？　すごくコミュニティと繋がってるから。あと横浜のシネマジャック＆ベティさん。ジャックさんはね、コミュニティから映画館。映画大好きで映画館をやりたくて作った人じゃないんですよ。だから、既に色んなことやられていて、あれありますよね、支配人とお茶を飲む日っていうのをやってますよね。あとコミュニティシネマセンターっていう組織があって、資金があってやってるわけじゃなくて、色んな助成金とか事業に応募して食べていってるから、全然手が回ってない状況なんだけど、映画館同士の良い活動を紹介し合う場っていうのを、結構やってな

いんですよね。年に一回コミュニティシネマ会議っていうのをやっていて、そこで事例発表みたいなのもやってるので参加すれば、どんなことしてるのかを知る機会はあるんだけど。全く難しい劇場じゃなくて、ちょっと芽のあるところをいくつか繋ぐと、ビジブルな感じになってくるんですよね」

直井「それでもなんかやりたいですよね。でもきっとコミュニティシネマセンターも年に一回シンポジウムとかされてますよね。原さんがプレゼンしてて」

工藤「時間はかかりますけど、続けているとやっぱり相談とか、うちもやりたいんだけどみたいなことは出てくるんですよね。だから、ちょっとそういうところと話していく中で、繋がりを作っていくとか、仲間がいるってすごい最高ですよね」

直井「そうなんですよ、こういうことやってて、工藤さんとか土肥さんとかが思い浮かぶ方がいらっしゃるというのは、既に道を作られてきている」

工藤「いや、私たちもぺんぺん草みたいなのを取ってるうちに少し道が、みたいな感じですかね。でも10年前とは明らかに違うと思います」

直井「これは確信に近いんですけど、絶対映画だと思っていて、こういう子たちと触れ合う一個の媒体って。学校だけじゃないし、家庭だけでもないっていうところの」

工藤「藤原先生の本読んでみてぜひ」

直井「あとこれがもう一個、上田の面白いとことなんですけど映劇の近くに犀の角っていう小劇場があって、ここは小劇場とゲストハウスが併設されているんですけど、そこで場づくりみたいなのを始めていて、のきしたっていう取り組みで、それがいくつか色々やってるんですけど、おふるまいっていう炊き出しをやったり、やどかりハウスっていう困り事を抱えた女性たちが気軽に泊まれるっていう部屋を、そのゲストハウスがコロナ禍でなかなか旅人がこれなくて空き部屋が増えちゃったっていう。これをやってる団体が場づくりネットっていうNPOなんですけど、ここが相談業務を受けてたんだけど、コロナ禍で相談窓口がパンクしそうで、あと芸能人の自死の報道があるとすごくて、若者たちへの波及効果が半端じゃないそうで、報道があった日の相談件数が恐ろしいくらい膨れ上がるらしくて。でも窓口ばかり増やしても実際に逃げ場がないとこれは大変だっていうことで、ゲストハウスを逃げ場にするという形を取ったりとか、そんな取り組みを映画館と小劇場と連携しながらやってて、だからシネマクラブに来てる親子もたまにやどかり使ったりしてて、それも良いんですよね。深刻にならないうちにちょっと息抜きみたいな」